



7600

大久保
武藏 鎧

下編

松林
伯圓 演
加藤由五郎
速記

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



44279

320

武藏證後編序

喜大久保と云へは三尺の童子と雖も徳川の忠臣

たるを知る此に三代の主君に忠勤せる彼の功

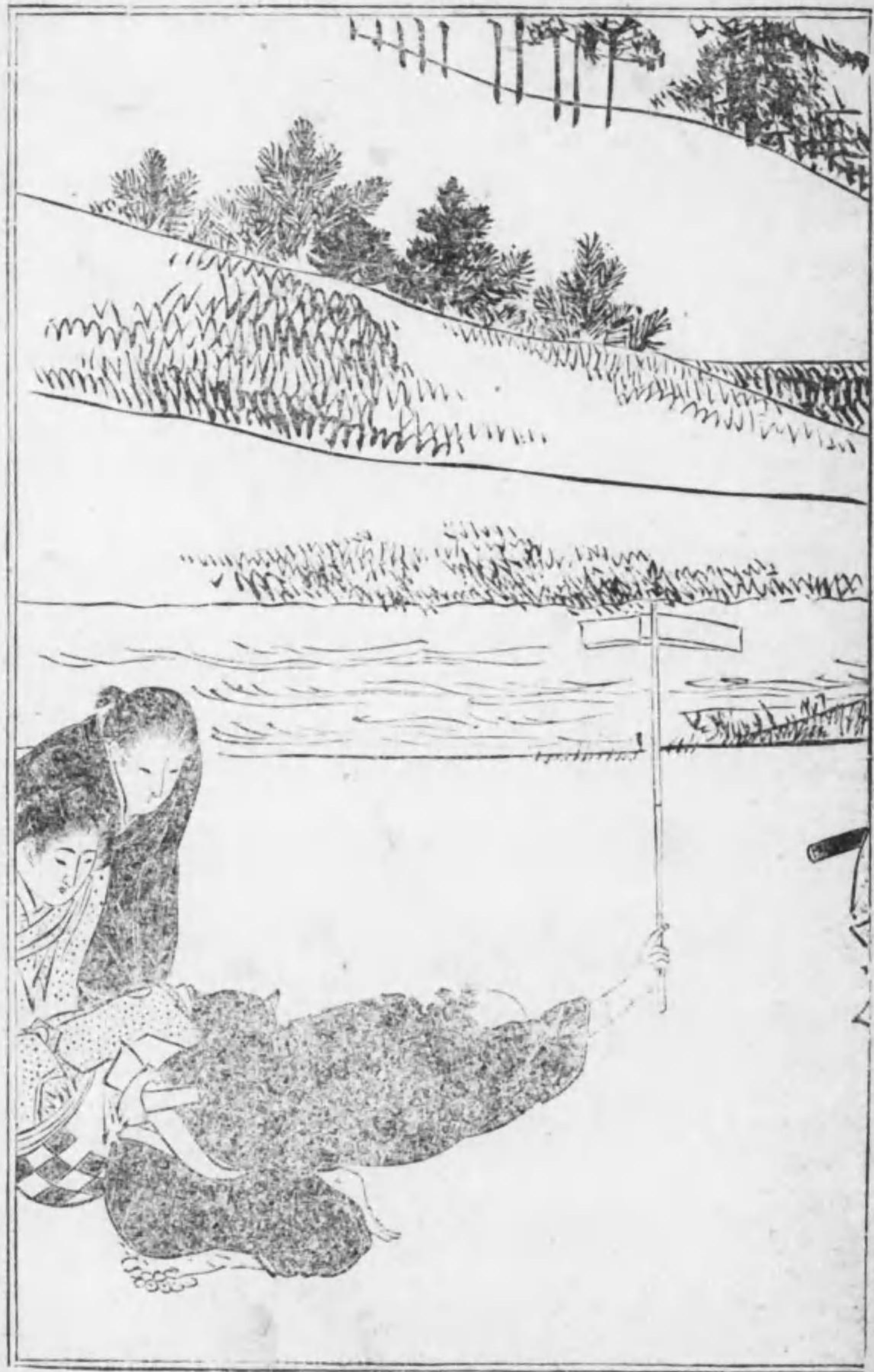
蹟に依ると雖も古來大久保公には牽強附會の説

多くして公を誤解するもの又多し本書此に見る

所ありて名を講談に借ると雖も大久保公の歴史

を丁寧親切に詳述したれば大久保公を知らんと









大久保武藏鑑

後編

第二十二席

松林伯圓講述

大久保は大抵な事なら押通して仕舞ふが上の上意を蒙りつて閉
 門の身の上とあつて見れば假令明白に分つたとした所が彦左衛
 門自身で乗り出して云々と云ふ譯には之はまゐりません水野十
 郎左衛門が十元哥今度のことを遣り損なうと雖でも應でも切
 腹をしなければ成らぬ餘程氣を注げて事をしなれば………
 ろれだからさ考へて見てくださいる昔衆六十近い阿爺が今まで遣り
 損ないもあいのに此所で腹なぞを切ると云ふのは口惜しい天下

欲せば此の書を読むに若かず否か讀むと讀まさ
 るは問ふ所にあらず唯だお鳥目丈け上田屋へ送
 りとよけ玉へかしと

あん申す

あなかしと

三十三年下秋

某識

大久保武藏鑑

泰平斯の如く静謐の御治政に大久保彦左衛門が詰らぬこと腹
を切つたと云ふては死んでの後までも耻辱だ冥土へ往つて東照
宮様へ何と云譯があらう……うむ宜い之は大老井伊掃部頭へ乃
公が一つ嘆願を仕やう少しく筋が違つて居やうが併し天下の大
老執權職井伊直孝殿へ面會を請はう睡み中のこの身白晝まいる
も憚り多いから早速今夜出掛ると仕やう之を聞いて一同の面々
も士成程それが宜しからう彦何しる皆衆は飲んで居てくれ
る家が淋しくなつて不可ないから
此春から笑つたことのないと云ふ寂れ果てたる大久保の屋敷も
今日には漸く愁眉を開きまして用人笹尾喜内三宅忠助共々に喜び
此所に旗本の面々酒宴を催ふし蟠龍は茫然と一室の隅に世の中
は恐ろしいものだと後悔の涙をばるりとと翻して居る彦左衛
門は仕度をしていたして頭りは選々として髪は生へ取亂したる姿で

大久保武藏鑑

はありますすけれども衣類はと申すと東照宮から拜領の御定紋の
付いたる小袖を上に着て其上には淺黄羽二重の藤の丸に大の字
の付きました大久保定紋の麻上下をつけまして夜中のことであ
るから忍びと云ふ鯛出し女乗物に乗つて若黨が一人忍びやかに
鎧も立てず駿河臺錦の小路屋敷を出て之から外櫻田の井伊掃部
頭屋敷をさして來つた
申す送もございませんが井伊家は江州彦根の城主三十三ヶ國の
旗頭御譜代の第一併も天下の大老其頃は井伊掃部頭藤原直孝公
でございませす
御通用門へ廻つて彦御門番御門番これは駿河臺錦小路に住居
する大久保彦左衛門と申する老人である貴様達は名前も知つて
居らうが掃部頭殿に天下急變一大事の儀に就て拜調を遂げたい
忍んで罷り越した重役衆へ取次がつしやい表門より入るべき所

大久保武蔵鑑

の身分であるが斯く通用門へ廻つたるは、彦左衛門が注意いたしたのであるから不審を立てないやうに取次で宜らう門へい畏
ましましたところ三十五萬石の天下の大老井伊位いに相成ると門番と
申したところ七八人の足輕は詰めて居る夫から上番と云ふも
のが三四人もちやんと見張つて居る其頃天下の見付々々を固めて
居るのと同じ事と云ふは、重役に通ずると云ふと心得たと見え
聞いて再び聞き直して重役に通ずると云ふと心得たと見え
まして之へ兎も角もお通し申せと云ふもので、彦左衛門と云へば天
下の御直參併も名高き政治助言役と云ふもので、彦左衛門と云へば天
下においても粗末にはいたしません之から開門をしてツ―と上屋
敷の邸内に這入つた早速ながら彦根邸の内を關よりいたしまし
て案内をいたすと詰合の家老岡本半助と云ふ人が廣間へまかり

大久保武蔵鑑

出で、大久保老人に面會をいたす、この岡本は井伊家において三
千石を賜はり御直參の大久保から見ると千石高が上だ然ども直
參と陪臣の差がありすから岡本半助懸念に半、これは、大
久保公にございますか其後は暫らくお目に掛りません何時も御
壯健で恐悦に存じます、彦、いや岡本かいまづ戰場生残りはお前
とこの彦左衛門位いの世の中と成りました、ハッハ、何時も健
康でお目出度うござる、半、有難うございます、大久保公にもお目
出度う存じます、彦、いやもう健康と云ふのみのお聞及びもあらうが此春か
ら遣り損つたよ、勾、配強くして母屋を倒す出る釘は打たる、と云
ふ年寄りの冷水、益ない事に口を出し御評定所の失錯、八代一件に
就いて大相器量を下げた岡本推量をしておくれ、半、左様何うか
然う云ふことをば御沙汰書でも承知いたしましてございます、が

大久保武藏燈

大久保公には御不似合の事と實は主人あぞども折々時をいたし
ておりました併し御愁傷の儀で……彦悔みを云つてくれては
誠に面目無い又閉門中掃部殿からして懇ろのお見舞等を頂戴い
たし千萬難有い今晚は是非お目に掛つて其事も申し述べたい鬼
も角も夜にも入つてをるし彦根公御酒宴の妨げにも相成らうが
一寸御目通りをいたしたらい半委細承知いたしましたお出での
趣きを主人に申し聞けました所が大久保老人に直々に逢はうと
斯様申されましてございませぬ支度が宜しければ何うか……
彦ろれは辱しけあひ早速の御承知大慶至極に存する半先刻の
仰せに天下急變一大事とありましたが全く左様で彦いや
天下急變一大事と云はねば取次ぎが骨を折つてくれないうか
ておいて早く手順を運んで貰はうと思つた半又例のお謀計で
ございませぬか彦兎角戦場往來をしたものは軍略と同じことで

大久保武藏燈

嘘を吐きたかつて困るよ半「ハッハハ」御道理いさ此方へど之
から井伊直孝公が待受の場所へ彦左衛門を連れて来る彦左衛
門隠しんで着座をする
之を見たら井伊直孝朝臣においては直さ御老体之へく一別以
來……彦其の後は久しくお目通りをいたしませんでした御機嫌宜
しう重畳に存じます多に頭を下げたことのない大久保阿爺も
彦根公に對しては少々の會釋があると思えて町囃に頭を下げる
彦就きましては御聞及びの通り不慮なる事から閉門を申付か
り彼之れ此所に一ヶ年外出さへも叶ひません此身の上、依つて必
になさ御無沙汰をいたしました直足下の謹み中影ながら心配
いたしおつた彦千万忝じけなうござる度々御見舞を……直
いや何ういたして心に任せぬこと其所で夜中のお見えまだ閉門
御死になつたと云ふ御沙汰もないが忍んで之にお越しになつた

と云ふのは……彦其御不審は御道理今宵まゐりましたる其實は斯様々々云々と八代一件に就きまして村山蟠龍と云ふ證人を引つ捕へ、うれも己れ一人ではない朋友水野十郎左衛門兼松、山中近藤、これも確かに村山の白状を聞き云々と前回前々回講談の手續きを残らず大久保が物部をいたすと賢明無双の掃部頭直孝朝臣之を聞かれ筆を取つて彦左衛門の話しの要領をちよいくと書き止め話し終つて後直宜しい明日登城いたして將軍家に上申を遂げ一日も早く再吟味の手續きを取急ぐでありませう御老人御安心をなさい彦は、つ……其御一言を承はりまして只今までは寢食の間も心を安める暇はございせんが今宵ばかりは緩くり春の心地で安眠が出来まする重復も申す様でござるが御大老には宜しく取急いで御盡力を煩はせませう直承知いたした宜しいまゐ……一献差上げやうではござらぬか彦いえく

近々明るき身体になりましてから改めてお盃を頂きませう尙も跡々のことを打合せて之から後は天下政治上の事大老の参考にもなるべき所の一二ク條の要點を話しをいたし互ひに袖を拂つて別れました流石は大久保であるから申の口まで彦根大老迄り出され彦左衛門も丁寧に挨拶をいたして之から駿河臺の屋敷へ立ち歸つて来たのは丁度四時半只今の十一時でございます水野山中、近藤の三人は盃を舉げて主人の歸りを只管待ち焦れて居りました

第二十三席

彦左衛門奥へ這入つて来て彦やお待兼ね十兄哥首尾は彦、皆く往つたよ源旨くつたど云ふのは上首尾かな彦上々吉流石は掃部殿だ何うも兵部少輔直政殿から次いで二代目の大老

大久保武藏鑑

又三代目睦の子は睦と云ふが名將の子は名將だ話しが早いヌッ
バリ分つたと見え明日直々に上様へ上申してくれさうだ
一同然うか何しろ結構それぢややもう二三日だせ 彦然うさ之
と云ふのも各々方の盡力查左衛門今度ばかりは眞以つて嬉しい
よ 十吾々の盡力なぞは何の役にも立つまいけれども正直の頭
に神宿る東照宮大権現が兄哥の頭へ乗つてお出でさる查左衛
門はたど手を打つて 彦いや水野旨いことを云ふたな併し乃公
の頭は榮鑑だから東照宮も三つて御難遣だらう、さ夜は更けても
構はない太白を上げて呑んでくれると昨日まで引替へて今日
は花の咲く春の心地の大久保の屋敷眠れる如き蠅の影もい
と 且 鬪氣に相見えまして
それはさてをき此方は井伊掃部頭天下の政治は急には相成らん
と例もより少しく早く御登城に相成りまして大老のことゆゑ老

大久保武藏鑑

中共に相談にも及びませぬ直ぐと二代將軍秀忠公に拜謁して云
々斯様々々八代一件の儀を落もなく言上いたすと秀忠公聞し
召されましたが 秀予も左様なことであらうと疾より推量いた
して用る何を申すも一方には證據あつて一方には無證據殊に查
左衛門は常々物事を輕卒にいたす所の心持があつて乃公のする
事はと云ふ自負心があるから一旦は閉門を申し付けをいたが斯
の如く證據が上つて見れば何よりの事である掃部頭其方查左衛
門を懲れみ彼之盡力いたすの段過分に存する老中共へ確と再吟
味の儀を申し付よ 直は、つ 秀予も隙見いたすであらうと云
ふ上意 直 難有き仕合せに存じ奉つると之から大老が己れの結
所へ御老中を呼んだ天の老中となれば申す迄もなければ問
老方と云つて此上も 願職でありませぬ併し大老と云ふ職には
何うしても頭は上りませぬ遠き昔しに響ふれば鎌倉時代の有様

大久保武藏鑑

で北條時政其子義時は御大老和田島山梶原と來ると一段下つて
おりまして之が御老中である今日最も目出度う王政復古の御代
に取つて見ると大老は總理大臣老中は各省の大臣であります
老中四人若年寄寺社奉行大目付お目付其他の役人へ對して掃部
頭から將軍家の上意なりとあつて八代家再吟味の事を申し渡し
ました一同承知に及ぶ茲において時は元和の四年十二月龍口
御評定所において再吟味有之の事正面御簾の内に二代將軍家
秀忠公出御西九大納言後に三代將軍家光公御政治御見習ひのた
め御同座諸役人列席には大老初め老中若年寄其他一同罷り出ま
す但老中頭本多上野之助ばかり内縁有之身分ゆへ己れから遠
慮して今日には欠席をいたす都て前吹上評定所の通り召出され
る人は八代石見守初めとして眞眞院之等は心に眞へのある事ゆ
へ一度は安心したるが今日は手の舞ひ足の踏むところを忘れぬ

大久保武藏鑑

とて控ゆる有様別けて眞眞院は美しき面に皺を寄せ色蒼々め
差し俯向いて控へた實に天女の愁うる時は玉冠も委むとかや美
しき面に愁を籠めたは雨に打たれた芙蓉の花正面に控へた掛り
大久保彦左衛門は昨日から閉門御免今日出張をして八代一家の
舉動を見て心の内に喜んで居る左右に扣へた諸役人も今日の成
行如何と問ひ呑んで居ります又下手に召出された山中角之
進の後家妙越中守愛美菊吉田又一まで枯木に花の咲いたやう
なる心にて今日の評定如何相成るかと思ひて扣へました
彌々八代一件の疑獄も此所に明白と相成ります
借て辰の口御評定所開廷に相成りまして今日は前回にも述べた
る通り將軍家御親子出御あつてお隙見といふ其頃は輕からぬこ
とでありませうから係り役人は申すに及ばず呼出だされましたる
一件關係の者までも謹んで扣へて居る故に有難高くなる辰の口

大久保武藏證

御評定所、咳拂ひ一つする者もございませぬ寂寛として虫なき野
原の如くであります
此時係り大久保彦左衛門少しく席を進めまして 彦石見守前代
八代越中守未亡人貞兵衛院、其他一件前々より關係の者罷り出でた
るか 一同ハ、ア 彦石見守前代、當年春以來其方共一
方ならぬ上へもか手敷を相掛け候段何分恐れ入つたる次第今日
は最早落着の時來つて居るから、何事も包み隠さず潔く白状いた
して宜しからう、石見、一々申述べずとも其方の胸中に覺えがある
親貞真院と不義密通を働き尙又前代石見守遺子源三郎といへる
者を失ひ八代家を横領なさんとせし巧み事、一度は多くの人を欺
き恐れ多くも將軍家の上臈を暗ますに至る最早今日に至つては
免るゝ所はないから、深く男らしく白状いたせ、罪に服せ何うじや
といふ親せき一言石見守謹んで 石、これは、何事を仰せられ

大久保武藏證

ると思ひの外矢張當年春以來のお調べと聞じても従つて石見守
別段に改めて申上げる必要もなし又白状いたせとは何事に候か
此身に覺えのないことを白状いたしやうも之無く御覽察を願ひ
まする 彦、黙れ未だ左様なことを申すか、然らば止むことを得ず
申聞ける其方は貞真院と密通を働いて居るといふ事を辯駁致すに
就て幼少の頃より佛門に志し深く男女の情交を絶ん爲に五体不
具に相成つたといふ申立て其節取調べ候所全く夫に相違ないとい
の事由て斯申彦左衛門、請の緒を切て今日に至るまで唯の一度も
引けを取たこともない老人が都合なりとあつて上よりお叱り
を蒙り凡る八ヶ月の今日まで罪人と相成つて罷りあつた、其原因
といふと皆汝等の奸計から起る所、然るに今日は確かなる証人等
を呼出だしてある、夫にても其方陳ずるか如何じや 石、いえ譬ひ
何やうな證據証人等がこれありませうとも前々申述べます通

り、毫も偽りには申通べませぬ。彦よし、其方も天下の諸侯の列に加
はる。從五位下、諸大夫の榮職を頭に頂いて居る重き身分であつて
獄卒の手に掛つて苛責を受け、てから白状したと申しては家の耻
辱、其身の外聞にならうと存ずるから、此方慈悲を以て何事もいは
せまいと存せしに望みとあれば是非に及ばぬ。唯今證據を見せ遣
はす夫にても白状いたさぬに於ては止を得ず。牢問拷問といふ苛
責もなきにあらす。石見覺悟をいたして居れ……こりや同心共衆
て申附けたる。裁醫者奴を是へ引出だして參れ。同は、あ所謂此
彦、左衛門といふ方の言葉はいけ。粗末でございまして、假にも將軍
家會禮をして居らせられる席に於て、裁醫者奴を引出だせとは隨
分汚ない言葉であります。戦場風の潔い言葉といへば、それには違ひ
はないが、聞分失禮な言葉を使ひます。然し是れが常です。から將軍
家もお籠りの内でくすくす笑つておいでになる。さて濡りから引出だ

されましたは何者なるかと思れば、年齢五十格好に相成る。惣髮撫
下げにいたして衣類は紋付の拾小袖に同じく紋付の羽織を着用
に及び、小手繩の儘にて白洲へ引出だされました。是ぞ飯田町中坂
下町醫村山蟬龍、斯るお席へは夢にも出たことのない裁醫であり
ます。するから震へて己れの身体さへも置ところのさい有様である
蟬は、あ彦、こりや蟬龍面を上げい。蟬へへえ。八代石見
真真院能く彼を嘘光を定めて何者じやか見ろつ。

第二十四席

石見守横目でしろりと蟬龍を見て、喫驚いたし、真真院も今までと
は違ひましてふるふる震へて顔色宛ら土の如し。此時蟬龍は體て
縁側の上をば見上げまして、蟬え、八代の御前、石見守様いやな
に御後室真真院様最早今日に至りましては、貴郎方が隠し通すこ

大久保武藏證

ども出来ない時に
なりましたから切望
深く御服罪遊ばし
まして因果應
て此蟻龍にも重荷
を下ろさせて頂戴
いたしたう存じま
す後悔懺悔の涙に
報の道邇世の中は
恐ろしいものでご
さいますと後悔懺
悔の涙に暮れて居
る石見守貞真院最
初の氣色何所へや
ら青葉に情々とい
たして身を慄はし
て控へ居る彦左衛
門大音揚げ彦何う
じや服罪いたしたか
尙亦念の爲申開け
る其方共に於ては
不義密會はい
たさぬといふ證據
を舉よと申したる
時幼少より佛門に
志し深く男女の情
交を絶んか爲に五
体不具に相成つて
居るとのこと然る
に此蟻龍の申立て
には汝の屋敷に罷
り越し秘密の儀を
申附つて五体不具
にいたしたは全く
蟻龍の手術に由る
所然も其傷口に六
七年の古びを付け
たは和蘭陀外科即
明膏といふ奇代の
妙藥是等のものを
用ひて終には汝の
罪を覆ひ多くの人
を欺き公儀尊厳を
偽り而して罪を免
れた是れまでの奸
計はもう書面にい
たし公

大久保武藏證

聽に達してあるか
ら今更喋々述るに
は及ばね此事ばかり
でも汝等の他の行
ひ推し測るべきで
あるさは是にても
白状か出来ぬか何
うじや……石ハ
アッど遙かに退つ
て兩手を突へて石
見守恐れ入りまし
てございます彦う
む恐れ入つたか
……貞真院は何
うじや貞御意に
ございます此期に
及びましては最早
包み隠すことも出
来ませぬお耻かし
うございます彦耻
かしいのは真
よりのこつた有繫
に是では強情も張
なからう恐れ入
つたか真恐れ入
ましています彦然
らば相尋る様側に
扣へ居る息八代源
三郎此者を失はんと
致して家老山中角
之進を暗殺致し武
州金澤の陣屋へ鈴木
爲之助を打手に差
向け忠義の者共を
殺し幼息源三郎及
び彼を産落したる
母親其他の者に幾
多の艱難を掛けた
るといふことは皆
其方共兩人の意中
より出でたること
であらう序でだ白
状いたして仕舞へ
石見守謹しんで石
仰せの儀聊か相

大久保武藏鑑

逃無之く何事も拙者共の意中より出でたる反叛、一朝の迷ひより
永々の間忠臣貞女を苦しめ八代家横領をいたし居つたに相違は
ございませぬ最早何事も隠さず服罪斯の通りにございませぬ
有鑿石見守潔い白状褒め置く石難有き仕合に存じ奉ります
彦てりや元家老山中角之進後家妙善前代八代越中守妻さく又者
吉田又一、一同聞く通りの今日の始末だに由つて左様心得ませい
一同有難き仕合せに存じ奉ります
大久保彦左衛門此時に至りまして彦是にて悪人亡び善人榮へ
上の尊意も安んずると申す者誠に芽出度き落着にて之有るが體
又上はに從ひ申渡すから左様心得よと此場に於てはた片の
言きましたのは八代家々事不取締りに付家名一旦改易仰せ渡さ
れ一旦武州久良岐郡金澤の陣屋お取上げの上追つて格別の御慈
悲を以て仰せ出ださる旨あり左様心得ませいと申渡す猶又八

大久保武藏鑑

代重三郎當時石見守是れまでの始末不屈至極に付き切腹仰せ付
らるゝといふ申渡し嫂貞真院義に於ては重き御處刑をも仰せ付
けらるべきの所辨へなき婦人の事故伊豆七島の内三宅島へ遠島
仰せ付けられると申渡し若黨吉田又一如何に忠義の爲とは申し
ながら重き御方様へ直訴奉るの段其罪輕からず御處刑仰せ付け
らるべき所格別の御慈悲を以て縁故ある山中源太左衛門に永の
預け角之進後家妙善さく源三郎追つて御沙汰も之有るべく一旦
山中へ引取を申付けると斯く申渡され八代家一件永年の疑獄も
爰に始めて解けました
爰に於て夫れく申渡しが濟むと上様は御本丸へ還御に相成り
係り役人も各々退出大久保彦左衛門の身体からは實に光りを放
つばかりでございませぬ八代家の善悪邪正も明白に相成りました
が是より後に至りまして幼息源三郎を以つて八代家再興を仰せ

大久保武藏鑑

付けられ知行所は安房の國北條といふ所に於て五千石の領地を
賜ひました
抑々大久保一世の譽れと相成るお物語りは最と長いことで其重
かるものは八代政談夫れから肝心の松屋しき川勝政談續いて松
前屋五郎兵衛結局に至つては阿部豊後守の隅田川水馬の譽れと
いふ大物が續々扣へて居りますから演者伯圖も一層勉強をいた
して事實を取調べて諸君のお笑ひを蒙むらぬやうに注意をいた
して口演いたします尤も武藏鑑と云のは徳川家時分から出來て
居ます寫本の題號で御座まして全部百卷程ありますけれども所
謂書本で御座ますから段々書損じから又寫し損ない杯が多く組
淵杜選で極く不完全で御座ます故に演者の此講談と題號は矢張
大久保武藏鑑と致しましたが其實は全く異つて居ます其は兎に角
第一言お断りを述べ置ます此大久保老人一世の物語りに就ては

大久保武藏鑑

段々調て見と隨分面白いとが御座ます一体此仁の氣質と云もの
は義侠に富で居て何事も腹に納めて置くことが出來んから口へ
出して喋々と饒舌りますから無遠慮な人だと思ひ切つたことをい
ふ甚だしいことをすると悪口雑言をされ陸では色々なことをい
ふ人がありましたらう夫が二三年の末今日に至りましては我
儘強情な老人とのみいふやうな事にありましたので能く考へて
見ると少しも悪くないふことはない徳川家三代の大忠臣にして其
身は十六歳の初陣からいたして戰場に出て數度功名手柄を顯は
し又家康公御難戰の折には御切腹をなさらうと仰せられたも數
度其時彦左衛門が御鑑の袖に縋つて今暫く我慢をして下さいま
し生は難く死は易うござるからと御意見を申し上げ爲に御一命を
全ふして二百五十年の大業を開いた是をして忠臣といはれなけ
れば外に忠義の盡しやうもございません去れば七十餘度の戦ひ

に一度もお供を欠したことがない
元和元年大坂落城の前、即ち夏御陣と唱へまする時分に三ヶ月程
大坂の御陣中に居た其折面々關東の自分持屋敷に居る奥方又は
舍弟其地伯父甥又老人があるれば老人夫婦の度毎に彦左衛門を送りました
是を罷めて飛脚か關東へ持つて行く其度毎に彦左衛門に對しま
して大久保さん貴郎も御内室の所へお手紙をお遣はしになりま
せぬか曾んな旗本の連中が頼めて送る此書狀は一萬本貴郎は遂
ぞお宅狀をお遣はしになつたことがありませぬが如何でござい
ます少し待つて居りませうからお書なさい 彦左衛門や毎度皆んな
が深恩にいつて呉れるが別に用はない用はないといつたつて夫
では故郷に待つてお出でなさる大勢の御家族が樂みがないとい
ふもので何か書いてお遣はしなさい 彦左衛門や再三再四促がされ
るが彦左衛門は最早將軍家の御供をして大坂出張といふ時から

故郷といふものはあるとは思はぬ

第二十五席

彦甲冑を身に纏ひ太刀を帯び東海道を乗出だした以上は命さ
へもないものと思つて居る死ぬ覺悟を極めた彦左衛門が故郷の
妻子の所へ愚痴らしい手紙を送つて何んとする一萬本あるとい
へば一萬本から送るのであらうから大勢に反對しやうといふのじ
やあないが………何んにも悪口は憎まれるからいはないが全体が
柔弱じや、然んなことでは戦さは勝てまいと思ふ故に彦左衛門は
妻子眷族ありでは思はぬ、ない所へやるべき道理はない、皆さん
拙者に構はずさつさど書いておやんなさい故郷の花は何うだと
か時候が悪るいから煩はないやうにしるか乃公も達者で居る
から悦べどかま色々なことを書いてやるが好いといふで打毀さ

大久保武藏鑑

れた深切のお旗本連中夫れしやあ御勝手になさい彦左衛門殿の
やうに然ふ誦めの付く理由のものしやあない」と是から書状を段
々と取纏めましてする中到大久保氏吾々は月に三度づゝは便
りを江戸へする者を御身ばかりが一週もしないといふのは却つ
て吾々が耻入るから御身は誦めがいても故郷に残つてござる
方が誦めの付く理由のものでない、嗚つてござらうから何か書
ておやんなさい彦左衛門からと笑つて彦左は「は、は、然ふ
お前方がどうも催促をするなれば人の交際がないといはれるは
如何だから書きませう待つてお呉んなさい」筆を取つてすら
ど認め彦左は是れを何うか駿河臺の屋しきへ放り込んでお呉んな
さい甲大久保さん封もしないで亂暴千萬しやあないか第一何
も書てないしやあないか彦左書いてあらあ能く見なさい是から
旗本の面々が見るといふと半紙半分ばかりに大きく書てある

大久保武藏鑑

一筆啓上火の用心おさん泣かすな馬肥せ目出度かしく
どしてある甲是つきりかい彦左夫れで澤山だ此書面が江戸へ
来た後或る舊家に此一筆書きの書面が所蔵してあるといふこと
でございませうが或は千尋の女も又一條りか二條り書いたもの
用の辯ずる所は同じで千尋の女も又一條りか二條り書いたもの
心おさん泣かすな馬肥せ目出度かしく彦左夫れで澤山だ此書面が江戸へ
て居ります取別けおさんといふのは彦左衛門の一人の娘であり
まして悪戯盛りで其娘を泣かすまいといふのは彦左衛門の一人の娘であり
此通り書いたものでございませう能くは平生の口癖、其所で
して後に此人はお中奥の小従二千五百石堀三九郎殿へ嫁入り
いたして奥方とあられた女でこそあれ流石は彦左衛門の娘であ
りますから勇猛活潑にいたして薙刀も能く使ひ、劍術は無双の早
業、良人さへ舌を巻く程でございませう

大久保武藏證

此堀の屋に賊が這入つて金銀衣服を強奪つて行ふ時に
奥方がばと起上りまして、賊八人に涉り合つて是を曾殺にして
其頭のお目付に届けたといふ程の勇婦であります、亦或る時に駿
河臺邊に出火があつて、實家方の大久保が餘程危うい其時に立烏
帽子を戴いて馬上で大薙刀を小脇に挿込んで只一騎で乗込んで
来て、さんお父上、母君お變りはありませんか、漸く御見舞に來
ましたといつて父母の無事を祝したといふ恰かも巴御前の再來
かど怪しまるゝばかり成長の後、は場の通りの勇婦であります、幼
き時に彦左衛門が愛するも道理千方去ればおさん泣かすなど手
紙にも書いて送つたといふ此情愛は餘程旨味のある話してござ
います
前回は八代一件是は元和三年より四年に跨がりました一條にて
今回は一兩年経つて元和六年の世界であります、駿河臺の大久保

大久保武藏證

の北隣りに屋敷を構へて居りました、四千五百石を領します、川
勝丹波守といふ當時御書院番頭を相勤めする一方の利も此
川勝は去年までは御勘定奉行を相勤め其後轉役いたして唯今の
役向きとあつたのでございす、同じ旗本の内にも恐ろしく威權
の強い者と又た弱い者とがありす、是は何ういふ理由だと申せ
ば申すまでにはございませぬ、が今の言葉でいふと電信のあるのと
ないのに由る警へば同じ判任官の内でも局内に於て恐ろしく勢
方のある者もあれば少しも勢力のない者があります、是は屬官の
後に長官が居つて引立てると引立てないとの區別に由る、今も昔
しも少しも變りのないのは此道であります
此川勝丹波守が勢力のある其所を尋ねるに當時若年寄筆頭で
も少しして、老中にもならうかといふ桑山左衛門尉といふ權家
がありまして、此人の娘が川勝丹波守の奥方であるから、肩の引立

大久保武藏鑑

てに由つて追々昇進をいたして御勘定奉行で大層金儲けをいたして少しく評判の悪くなり掛つた所で舅に頼み直ぐに役替をいたして御書院番頭と相成り御勘定奉行の時分に儲けた不評をいたして御書院番頭として仕舞うやうに出来て居る去れば丹波守は外のお奉行から見ますと餘程騎り増長をいたして其屋敷の体裁も宜しく如何なる諸侯と雖も遠く及ばぬ程の驕りを極めて居りました家來も數多召使ひ奥方の外に極く秘藏にいたします愛妾が二人程ございます時の勢ひであるから誰しも陰では甲何うだまあの川の屋敷は……費澤じやあないか乙旗本でそんな驕りを極めて居る人は先八高騎にもなからう羨しいことである二千石や三千石貰つて那程の費澤は出来る理由のものじやあないが今に昔しの尻が割れやあせぬか驕るもの久しからずといふから……と陰言は申して居りますすが面と向つて川勝のこと

大久保武藏鑑

を罵る者は一人もございませせん悪く云ひながらお梅の芥を搦ひに出掛ける者の方が多い旗本其他の小役人は皆斯の如く蹈う中にも一人隣家の大久保彦左衛門は道で逢つても挨拶もせず二六時中是に眼を付けて彦何んだ川勝の如き……太平の世に成人なつて戦の血腥い味も知らず居ながらにして親の勳功に由つて大祿を……り當時は姻戚の好誼で桑山左衛門の引立を蒙り夫れだけの勞功もなくして大切のお役を勤め賄賂巷直を是れ事とし不淨の金を以て己れが元高よりは遙かに餘計の費澤を盡し其身は御書院番頭で候といふ美麗びやかなる所の打扮をして飽までも天下を我物顔にいたして居る憎い奴じや折があつたらば目に物見せて呉れなければ相成らぬと此大久保に白眼されましたのが川勝の一世の浮沈であります折もあつたらば時も來つたらばと待つて居る人があらうとは思

大久保武藏鑑

は油断大敵で川勝が增長をいたして居りますから何うも已れの屋敷が狭くて窮屈で仕方がないと気が注いで見ると隣りの大久保の屋敷と己れの屋敷との間に五十間四方の空地がありますこれは碌々にかこいもせずには廣々たる所の野原同様に相成つて一本の大赤松が枝葉を垂れて大層葉が繁り誠に美事の松是は大方武藏野といつた昔家康公御入國前からあつたものでございませうか大した物だ夫が一本あるつきり外に何んにもございませぬ日が暮れますると多くの乞食野伏りが此空地へ集會を付けて寒き夜なぞには炊火なぞいたして暖かくなると小人の常態俣からず此土地で不良の袁彦道をいたして居ります

第二十六席

寒い晩には右の乞食達が集つて俣りもなくとんく炊火をして

大久保武藏鑑

誠に不用心殊に依つたら放火も随分やりさうな体だ大久保彦左衛門は大度量の人間だから決して左様なことには構はない川勝は不圖此明地に眼が付きましたから丹こりやあ上に願つて此五十坪四方の明地を借り受け諸説を爲やう殆んど隣家の大久保の明地のやうなものではあながの命をあら查左衛門も仕方がなからう此明地へ諸説をしたなれば家中の者も廣くなつて大きに悦ぶであらう金子もあるし地面さへ借受ければ諸説をするには支ひないと思ひましたから爰で舅の桑山左衛門尉に逢つて丹誠に拙者の屋敷が狭くて困りますが隣りの明地を借受けたいものでござるといふと左宜しい含み置かうから安心をいたせ遠からず許しを得て遣はすから……と受合ひましたが爰がお役人の邪まといふ者

桑山は列席の大名なぞは何う拵ひたかは知りませぬが人もあら

大久保武蔵鑑

うに大久保彦左衛門の地面と相成つて居る明地若干寄の感光で
上を拵へてどう件んの明地をば聲たる所の川勝丹波守の許
へ下し置かれまして然し大久保方へ一應断つて置くが好からう
とございますから丹波守の用人が隣家へやつて来て用お頼み
申す笹尾喜内が喜是れは御隣家の御用人能うお出でなさ
れた何んの御用でござる用餘の儲ではございませぬが御當家
の附屬地とも相成つて居る隣りの明地五十坪四方を此度上へ願
つて拙者屋敷に置て上から頂戴いたしました其理由は御存じの
通り手前屋敷は實に狭くて何うすることも出来まぬ故に明地
へ建増をいたしたく頂戴いたしました右の段御断り申上げます
喜内聞いて腹の内には喜何んば鼻に巾の利く者があるとは云ひ
あがら我儘なる事をする者だ那の明地は正に當家の地面夫を先
へ一言の断りもあく上から戴いて置いて断はるとは何事……名

大久保武蔵鑑

少々お扣へ下さい主人が何んど申しますか一應問合して見ま
すと奥へ來つて喜御前隣家から斯様々々申して参りましたが
如何いたしませう多分貴郎が不服を仰しやるならんと川勝の用
人を待たせ置きました彦左衛門聞いてからからと打笑ひ彦然
ふかいや好い〜承知いたした御充分にお使ひなさいと申せ予
に所存があるから必ず彼是れ云ふな喜は、あ長りました……
さて御用人主人は確かに承知いたしたるの趣き何うか御充分に
御使ひ下さいませうと用人は立歸つて仕舞ました
でございませうと用人は立歸つて仕舞ました
四五日立つと改めて上から此御沙汰があつた其方の附屬地と
相成つて居る明地を此度川勝丹波守へ下げ遣はしたから左様存
せいで柄突く大久保彦左衛門は何んにもいはずいつもの人ど
遠つて極く温順く彦委細長まり候御自由に……と神妙に受け

大久保武藏

をいたしたの人は人々も不思議なことのやうに思つて大久保も先
年中は随分強情我慢の人であつたが一つづつ年も年を取ると大變
に違つて来るものた生れ變つたやうに温順しくなつたわいと話
し合つて居たのは大きな間違ひ果せるかな彦左衛門一物あつて
面は至極優しく見せ掛けまして川勝丹波守の請出を待つ内
右の明地に構ひを拵ひ大工左官諸職人が這入つてとんく建
に取掛つたから金子の威光は恐ろしい見るく内に善盡し美輪
したる極く贅澤の新座敷が出来に及びました彦彌々彼を若し
める時節到來いたしたり見よ己れ身の權威に誇り我儘勝手
の振舞をなす其鼻柱を挫いて呉れねば相成らぬ新座敷出来披露
は何日いたすであらうか其日を待つて彦左衛門の度胸を見せに
やあ威んど待て居る是が松屋敷の發端……
前々回より松屋敷の講演に取掛ましたが全体此大久保彦左衛門

大久保武藏

といふ人は其先祖は大久保ではございませぬ那須の七郎から出
まました人で宇都左衛門五郎といふ人がありましたが此宇都
いふ人は下野の奈須を立退いて其後暫く三州西尾の陣に大久村
といふのがありまして是に參つて住居をいたし夫れから大久の
姓を付けましたものと見えす此左衛門五郎といふ人暫く相州
小田原に居りました或時一日山獵に參る何れ山獵に參るには狗
を率いて行かなければありませぬ乘て飼置きました愛犬が一疋
ありました惣休の毛が眞つ白で額の所に黒い星がおりますので
是を左衛門大層愛して居りました其狗を曳いて千草山といふの
へ參る是はさかくの高山で丁二台目あたりの所まで參りま
した何が分にも眠くなつて來た弓を掻拵んで今日は獵を爲やう
と思つて參つた所が折ふし五月のことで四月五月と來ると心持
が長閑で誰しも眠い盛りであります

二度寝ても日は山にあり藤の花
といふ句がある位い藤の花の咲く時分には實に眠い左衛門五郎
は何分歩こうと爲ても倒れるばかり眠くなりましたから其所で
山藤も咲いて居りますし其下の木の根方に横たはり好い心持ち
にすや〜寝て居たするとわん〜
ものがございますから左衛門五郎驚いて目を覺し左何んだ仰
々しい吠へやうをいたして眠いから少し休まうといふのにおん
で然んなに吠へると愛犬のこと故打ちもせず人に物いふ如く叱
つて何分にも眠いから又右の所へ横になつて眠るとわんわん
〜とけた〜ましい吠へ方左これ奈是然ふ人の眠りを妨げる
如何に畜生とて淋しいとは云ひながら寝り人に人の眠りを破ると
いふことがあるかうむ其方も寝ろ〜う〜と大膽なる左衛門
亦も腹込んだすると今度は耳の傍で火の付くやうにわんわん

〜
左これ何故に斯くまで主の命を用ひず三度まで眠りの邪魔を
いたし居るか犬わん〜
元より短氣な人でございます故一刀引抜き様にすばりと犬の
首を切つた其首がひゆ〜と上に飛上りまして左衛門五郎
はてさて思つて見ると其大きな中枝の二股にあつて居る間から
がさ〜と出て来たのは其頭醬油樽程もあらうかと思ふ鱗紅の
舌を出だして今左衛門五郎を一口飲みました体を選けたる
飛び上がるも突然に鱗の咽喉首に喰ひ付きましたした下りて來
左衛門五郎一刀を提げたることにしてする〜
た鱗の胴中から切り込んだ刀は業物切手は左衛門何堪まりませ
う々わ〜と大地震動いたすばかりの音が爲て頭尾二つに切
れ頭は方は犬に喰ひ付かれた爲めに身動きもいたしませんが尾

大久保武藏鑑

の方はのた打廻して居ります其時に左衛門五郎は暫く犬の首を
打眺めて居りましたが涙を流しわつと聲を揚げて泣いた左あ
一借は吾是に眠りしは此癖吾れを呑まんといたしたればこそ
犬が注意を為て吠へたのだ夫ども知らず主の眠りを妨げたと怒
りの餘り其方の首を切られたを恨みもせで其癖の咽へ喰ひ付
くといふは威服の至り吾れ其方の志しを知らず首を刎ねたは生
涯の誤り何うぞ許して呉れろよと犬の死骸を暫く打眺めて落涙
をいたして居りましたが流石は大家をなす人の先祖は別段なも
のでありまして涙ながらに其犬の死骸を葬り首は首で別に葬む
りましたのが唯今でも小州小田原青木町の入口に犬頭神社とな
つて居ります是を以て上り藤に犬といふ字を入れたのが大久保
定紋の蓋艦であります

大久保武藏鑑

其宇都の家より三州西尾の大久保村へ一時故あつて御引取りに
なり改めて其姓を大久保といふことにいたしました大久保彦左
衛門ばかりが名前が高うございませすが左衛門五郎殿には彦左衛
門のみではない大久保七郎左衛門又は治右衛門杯といふ何れも
御兄弟があつて彦左衛門は前名平助と云ひ七男でございませ
涯七十餘の難戦に一度も家康公の御供を欠したことがありま
せぬ是は前々にも委しく申上げてありますに徳川三代の大
忠臣家康公がこれ彦左衛門なりども其方子に留め只今までの忠
義に愛め聞き届け遣はすから彦難有き仕合せにございませ
しは別段高等に望みはございませぬ唯御願ひといふは餘のこ
とならず彦左衛門生涯我儘御引を願ひたう存じます此時に居並

第二十七席

んで居た大名は驚いて常でさへ我儘の彦左衛門が此上我儘御免
となつた日にはどんな事をするかも知れないと思つて居ると
家彦左衛門其方の我儘といふのは何ういふことをいたすのじや
彦左様にございませぬ唯申上げましたばかりではお分りになり
ますまいから唯今御前に於て我儘の手本を出します成はと彦
左衛門の我儘が天下の爲めになる我儘と思召したなれば其時に
御許しを願ひます亦君の御意に叶ひませぬ節は是非に及びませ
ぬ強いてお許しを願ふとは申上げませぬ家夫れは一段に面白
い我儘の手本といふは如何なることをするか早速それにていた
して見い面々はを見て彦左衛門が我儘の手本を出すといふが何
をするんだらうせん事をするかと見て居ると彦左衛門邊りを
きよるく見て居りましたが先づ此控へて居る諸役人の中で最
も人物は上席に控へて居る江州彦根の城主三十五萬石井伊掃部

頭直孝殿此お方に向つて彦左衛門彦掃部々々井伊様は驚いた
何うも無禮千萬の奴だ旗本の分際で徳川家に於て家柄といはれ
る手を捨ててにするとは何んな奴があるものだと思召したから
少しく色を變へて黙して在した
すると家康公が掃部彦左衛門が我儘の手本を見せるといふから
其方返答をいたして遣はせ掃部へい………迷惑ながら返答をして
やれと仰やるから君命は破れませぬ掃部委細長まりました彦左
衛門何んじや彦左あゝ掃部ちよいとお出で掃部頭様は能く色
んなことをいふなど思召した仕方がないから掃部頭傍へ来る
と彦掃部掃部何んじや彦何うも肩が張つて不可ん肩を叩い
てお呉れ是はさうも失禮千萬な奴だと思召して居ると家康公御
覽遊ばして家掃部彦左衛門が申す儘にいたして遣わせ誠には
や怪しからぬ事だと思つたが委細心得て彦左衛門の側へ寄り肩

大久保武藏 燈

をどかく叩き出した 彦、あゝ、不可ないくもつ 確乎…… 戰場往
來をして江州彦根の城主井伊掃部頭とも名乗るべき者が然んな
ことでは不可んもつと確乎叩きなさい、掃部頭もぐつと小癩に觸
つたから力任せに強くやつた 彦、成ほど少し利いて来た、未だ
然んなことでは何うも入下の豪傑といふことは出来んも少
強く……井伊の殿様も腹が立つて堪らぬ仕方がないから其
儘叩いて居ると彦左衛門右の手を出して掃部頭の額の先きをび
しり打つた 彦、是は彦根殿失禮……え、上様へ申上げます彦左
衛門の我儘は即ち是れでございませす家康公始終目を放さず御覽
となつて居たが、はたと小臍を打つて 家、好ういたした彦左が我
儘の儀差許す掃部頭は驚いて是は大變だ是れから年中我儘を言
續けて肩を叩かされたりして居るものかと思つたが是が以、我
心といふ意味深重なこととでございませす決して掃部頭に無禮をし

大久保武藏 燈

たのではない、彦左衛門の胸中では今天下の役人中此掃部頭位
の方は少ない、上様の御生中は宜しいが萬一上様御他界になつ
て私しがもし生残つて居れば其時に井伊殿に限らず天下の大祿
を領する諸候我意に募り我儘をした時には誰方でも頭を押へて
御意見を容れる其時に其禮者といふお咎めのないやうに今から
御免になつて置きたいといふいわず語らず彦左衛門の仕方話し
でございませす。
前回は餘談でありまして松屋敷の講談が爲に遅なりました、本回
よりは以前に立戻つて本筋に還入りますが、さても大久保彦左衛
門、此度隣家川勝丹波守の無理願ひに依つて、承知はいたすまい
と人々も存じて居つたる所が、案外温順しく明地を川勝へ貸渡す
ことに決定いたす隣家に於ては川勝が左もあらんと得意になつ
て早速普請に取掛りました元來平生の氣質は僅かのことにて

大久保武藏鑑

筋を立てまして兎角八ヶ間敷の人物であるのに此度のこと
温順く納まらうとは思ひませんから大久保の家内猶又用人其
外の者も今度は大層家の殿様が神妙にお成んなすつた何うも不
思議なことだと斯ふ思つて居るが是れを彦左衛門一物あるに由
つてあり
隣家で構ひをいたし夫れから地均しに取掛りまして、いよく棟
上げといふ時に隣家にては芽出度いとあつて祝をする彦左衛門
も同じやうに彦左衛門、今日は棟上げだ乞食も身祝ひといふ貧乏
の彦左衛門も少し驕り込もう、一同の者にも目差鯛で酒でも飲ま
せる用人の宮城忠助が不思議に思ひまして 忠、御前御隣家の川
勝様で今日は棟上げのお祝でございませぬ然るに屋敷を取られた
御當家さまで棟上げの祝といふのはちと可うございませぬ彦左
何んでも好い然んなことは貴様達の知つたことじやあない彦左

大久保武藏鑑

衛門の胸中に祝ひとがあるから祝へといふのだ亭主の好きな
赤烏帽子といふ主人公の言付けでございませぬから笑ひ興して彦
左衛門の屋敷も共に祝ひますといふ
其内に隣家川勝からいたして用人を以て丁寧に使者を遣はして
今日は吉日良辰でございませぬからほんの棟上げの儀式をいたし
ます、高き所へ人も上がりますからお目觸りにも相成らうと存
するから念の爲お断りを申す、就ては御主人公へ尙又念の爲めに
一應申上げます、外ではありませぬ此度拜借地の所でござい
ます、御前の仰せには橋を限りいふこと、由つて橋を見切りとし
て仰せの如く手前方へお借り申したのであるが彼の松は極めて
大木にして、其枝葉は手前やしきの方へ多く垂れまして甚だ普請
其外にも困難でありますから、急ぎますことではありませぬが手
前屋敷の方へ出ましただけの枝葉を切拂ひたうございませぬが、こ

れは御當家に於てお出入りの植木屋にでも仰せ付けられて下さるか、手前共の方にて植木屋に申付け取拂はせまして宜しうござりまするか、よろしく足場を掛けねば相成りませぬから念の爲めに、お断りを申上げて置きます、此段どうか御主人さまへ宜しく……と斯う述べた、すると大久保の用人宮城忠助、これを聞いて忠暫くお控へ下さいと奥へ參つて彦左衛門に一伍一什をいふと彦左衛門これ聞いて彦左衛門が面會してやらうと委細構はぬお人であるからつかつかと御家の用人が雇して居る使者の間へ参りまして彦左衛門が御家の用人は……用御意にございませす彦左衛門がらとは云ひながら掛違つて逢はん、乃公が彦左衛門だ用へい……恐れ入りましてございませす彦川勝丹波守殿から口上の趣きは委細承知いたしました、今日は棟上げであるとのこと、誠に身出度い次第だから拙者方に於ても最前から家中を集り

て棟上げの祝をして居るて用へえー御當家様……彦然ふよ用ろればどうも恐れ入りました彦で先づ其の事は宜しい……が唯今のうの松のことだが伐木などいふのは怪からぬことである、よしや貴様の方の普請の妨げであるからと申して私に伐木いたす杯といふのは以ての外だ當家にも植木屋もある貴様の方にも植木屋があるだらうが左様なことは必ずく相成らん様松へちよいとでも手を付けることは成らぬ

第二十八席

彦もし松の小枝一本でも手折る時は此彦左衛門が其分には差置かぬ、又松にちよいとでも手を付けても其儘には置かぬ、必ずしも乃公が鐵砲を持つて其者を打殺すから左様心得る、其時になつて決して悔まれぬやうに職工、大工、齋の老に至るまでへ粗末のきい

大久保武藏鑑

やうに申渡せ、何者にても無論宥捨なく鐵砲で打殺すから是れは能く川勝丹波守に斷わつて置け、况んや伐木なぞとは怪からぬことだ地面は貸して遣はずが左様なことは相成らぬ、斷つて置くぞ用へえー 彦丹波守に口上の間違はぬやうに能く申せ 用委細畏りましたと川勝の用人はぶる 震へて己れの屋しきへ立歸りました

大久保武藏鑑

左衛門を何んとも思はぬ男、さつと面色を變まして 丹や一奇怪あることを申す奴かな、松に手を觸れたばかりにても鐵砲にて打殺すといふは無禮至極、然し彦左衛門狂人のやうな奴だから何をすることも知れない、こりやあ一應公儀へ表向き届けて公儀の威公で取拂はせやうと夫れから早速桑山左衛門尉の所へ來つて川勝が彦左衛門の返答を述べると、桑山是を聞いて 左穩かならぬことをいふ親父である、よし 今一廻公儀の威光を以て彼の鼻を挫き以來我意増長をせぬやうにいたして呉れんと是れから桑山若年寄の威光を以て老中及同席へ此赴きを申た

ります大久保屋しきへお差紙が到着いたしました、すると彦左衛門も外に用がさい詰らねことで此親父を引張り出し困つたもの

だ、大方川勝の一件だらう行くのを止すことは出来んて長いものには巻かれるといふから負け序でに大負に負けてやらうと心由少しく不平の体で御用部屋へ罷り出でました、老中若年寄がずらりと並び居ります、いや、彦左衛門殿貴殿をお呼び申したは外のことでではないが此度上よりの御沙汰で御自分の明地を隣家川勝へお貸與へに相成つたことに就ては誠に神妙の至り上に於てもお悦び有ることだ、借地いたした川勝は申すに及ばず斯くいふ吾々まで大慶に存じて居つたが夫れに就て川勝と御自分の地界ひにゐる松に手を觸れたる者は善悪邪正を論せず打殺すといふことであるが夫れは餘りに穩かならぬことではないか、是れより譜に多くの職人も這入れれば誤つて手を觸れない限りもない殊に川勝の最早屋敷と相成つた以上地界にある松の枝位いは拂つても好さうなものであるが、此返答に就ては彦左衛門殿には不似合

のことで存するが如何の思慮であるか念の爲に承はりたい、彦左衛門を召され僅かの御尋問は甚だ恐縮至極、然し御代は太平先ず、恐悦千万に存じます、いや小松の儀は唯今彦左衛門申上げますとも追つて相分ることがありませう、元來、それだけの空地をば上に置てお捨置きに相成り又彦左衛門もろろ、廣い地面は要らぬから橋を土臺として皿地にいたして置きましたのであるが……とじり、と膝を進めました、彦左衛門を川勝が上の御威光を持ちまして自分の屋敷を立増したといふのであるから夫りやあ金子のある奴は好きなことをするが宜しい、殊には御老中若年寄のお聲掛り又上からも御心添が有之つたのだから仕方がないから承知いたしましたのであるが彼の松の木に就ては由緒有之るに就て、決して手を掛けることは相成ら

大久保武蔵

内儀木なぞとは思ひも寄らず猥りに彼の松へ疵を付け損害を興へる者は鐵砲を以て打殺しても構はないことがあるからでござる。是は太平の世の御役人が御存じなことで、好いではござらぬか、那の松を切らずとも普請の出来ぬことはありますまい、此りやあ川勝に殿命を持つて御達し下さい、彦左衛門の答へ是より外にお答ひはないとこり言放して大久保がつかつかと退出を致して仕舞ました、其所で桑山が考へました、が「そんな無法な奴であるから何をするかも知れない、夫では川勝の方を言諭して松へ柵でも拵へさせやうといふので早速ながら川勝に右の段申通じ、松の東西南北へ何間といふ柵を拵へて聊かも松に觸れないやうに取付つたのであります、是れにて松の事は先づ無事に納つてしまひ普請はとん／＼歩を進めまして名に負ふ川勝丹波守が儲け込んだ金ですることであり、ますから日ならず立派に成功いたしました。

大久保武蔵

離れ座敷から高麗都て善盡し美盡し旗本の川勝には不似合の有様、いよ／＼近日座敷開き芽出度い／＼といつて悦ぶと、大久保の方でも是れを聞いて「彦左衛門」近日座敷開き芽出度い／＼と悦ぶ家族や用人が此有様を見て殿様は間違つてお出でなさる一向理由が分らないといつて居るが彦左衛門は一人で點頭きまして「彦左衛門」就の時か来たと思ひ一人思ひ出し笑ひをしてくす／＼、氣味の悪いお爺さんがあればあつたもので其内に元和六年八月十五日、今霜は川勝の新郎で月見の宴を催し是を座敷開きの印しといいたすといふ、御正客は男御若年寄桑山左衛門尉を始めとして向御同役其外屬官一同へ招待状を遣はす、夕景からして入來を乞ふといふことで山海の珍味は臺所に溢れまして、何んにいたせ川勝は權家であるから賄賂巻直といたして諸方からの音物魚鳥山の如く大抵な料理茶屋は及びませぬ位の、料理方は腕

の勝れた者が敵名朝からいたして立働いて居ります
其夕景のことで新らしい座敷別段掃除は入らぬけれども尙綺麗
な上にも綺麗にいたさうといふので高殿の飾り付け幅は何んに
いたさうお茶は何んにしやうと贅澤好みで高殿に立働いて居る
すると彦左衛門は縁側へ出して北隣りを暫く凝視して居りまし
たが彦左は、あ今日は隣家の座敷開きか……成ほど……老眼で
確とは見えんけれども能く出たあ、大層な普請だ、實に大層高
機とは此事であらう泰の阿房宮も是には遙か及ばんで、あは、
人の心が追々に太平の恩澤に浴して奢り増長なし儘か旗本の
川勝波丹守位が大諸侯も及ばざる附講の結構、恐れ多くも東照宮
御在世で斯様なことを見聞遊ばしたら歎かほしいことに思召す
であらう、然し左様なことをいふも流行後れか、兎角にお髯の塵を
拂ふ世の中、定めし今夜も川勝の屋敷へをべつかり共が大勢参る

であらうと聞へよがしの獨言

第二十九席

彦左衛門は尙も歎息をして彦左定めし今宵は大勢参つて丹波守
のお髯の芥を拂ふであらう正客は桑山だといふ、片腹痛いことで
あると獨言をいつて居ります内に日は暮れて月は未だ上がり
ませんが、錦燭臺金燭臺輝き渡るばかり如何にも御入客を待衆
ねて居ります様子、然るに川勝の愛妾おかのにおよしといふ十七
歳に十九歳、姉姪窈窕たる美婦人、後に彦左衛門の申立を聞けば全
く實の姉妹で是を一つに置いて川勝が寵愛いたした、然も是に惑
溺いたし、まして姉妹の申すことは何事にも取上げ正妻の勢ひ
は愛妾二人に奪はれて、家中の者も愛妾に暗ひますから自然と
勢ひも宜しいといふ世だしきに至りますと生意氣に御政事向

きに何んにも知らぬ女共が口出しをいたしますといふやうなこ
とで、然りも唯も川勝は決して咎めもいたさず却つて才子賢婦人
なりと代るく、に寵愛いたすといふは第一に人倫の道に背いて
居る、是等知らして彦左衛門平生から要らざることではあるが怪
からぬ奴だと白服んで居たといふことであります
右兩人が高樓の窓の傍へ摺寄まして、よか柿お様、大層高いお座
敷ではありませんか、かほんに結構なお座敷にはなりませんが
邪魔になるのは此様、今宵は月見の御宴、此松さへなかつたら少し
も目に遮るものはありますまいに……よ、本當でございますね
系、お隣りの大久保といふ親父が剛情を張つて居るばかりに取拂
ふことが出来ないのでいふ殿様のお話し、惜い彦左衛門親父と此
松、斯ふしてやらうではありませぬかと袂より何やらん汚れの紙
を出し、さして之を玉にしては姉妹で松を目掛けて投付けて居り

ました、彦左衛門様側に立つて是を凝視して居りましたが、彦やあ
何やら不淨の紙を投居るな、川勝の淫婦奴等、此彦左衛門が見て居
らぬことなれば兎も角、現在此を見居つては助けることが出
来ぬ、よし、思ひ知らして呉れんと面色を變へた彦左衛門忽ち
取つて返して、床の間にありました所の鐵砲小傍に搦込んで以
前の襟側の鼻へ出ると、恰も好しおかのにお芳の兩人は今を盛り
の姉妹の美人、露の玉の緒切れなんどいたすを知らぬ凡夫の淺ま
しさ、勾欄の縁へこう寄掛つて尚紙玉を投げて居る、視ひを定めて
居る内に姉の脊中へ妹は寄掛り重なつた所を見澄し火蓋を切つ
てをいん……と放した場數、練の彦左衛門、筒音高く彈は忽ち
中いたして姉の胸板から妹の肚を唯一つ發で貫いた、わーっ……
といふ悲鳴と共に其所へ血煙りと共に二言もなく倒れました、此
筒音を聞いて川勝の屋敷の者は大いに怪しみ來つて見れば此有

大久保武蔵 鑑

様、上を下へと取つて返す、彦左衛門は確かに手答へいたしたりと、左りの小手を翳して隣り屋敷をはつたと白眼み、彦左はつは、つと聞へよがしの高笑ひ、此時川勝丹波守は思ひも寄らぬ女の悲鳴、不思議なこと、樓上へ登つて見ますれば最愛の兩人の美人が紅に染んで息ははや絶へたる様子、其傍らに氣絶いたした侍女一人、是を段々介抱して機を聞くと其の玉は御隣家の大久保彦左衛門さまのお様の邊から飛んで来たとの答へ、丹波守は「大久保彦左衛門が亂暴に相違なし人もあらうに川勝の屋敷に發砲いたして殊に最愛の妾二人までも殺すといふは亂暴狼籍沙汰の限り、こりや此儘には棄置き難し、使者を遣はして應對させるは面倒、丹波守自身大久保のやしきへ罷り越して確と談判を仕つらん、もし次第に由つたらば彼の老人唯は置かじ」と刀を取つて立上り、恰も半狂人、其外の人も餘り遠

大久保武蔵 鑑

慮ことには馴れないから唯驚いて騒ぎ立てますのみのこと、畢竟醫者の手でなければ仕やうがないから一方は醫者を呼びに行くとといふ所へ玄關の方に聲あつて「桑山さまか入りでございます、願てのことに桑山左衛門尉は案内に連れましてすか、進んで参りますると、何となく川勝のやしきが上を下へと騷擾の様子、少しも己れに構ひませんから左衛門尉邊りの様子に心注ぎまして桑如何に新宅披露の爲、來客が多いとは云ひながら此騒ぎは何事ぞ、さて、雄風景のことであると思つて座の中央に立上がり、何の座敷へ往つて好からうかと躊躇いたして居りました時に血眼になつて出て來た丹波守桑山の姿を見まして、丹波守は「能うこそその御尊、唯今少しく取込みが出來たして御不興の段恐縮の至りに存じ奉ります、桑左様な様子と見受けましたが何んぞ珍事でも出來いおしたのであるか、丹波守様でございませす、お隠し申

大久保武藏鑑

すこども出来ませぬから包ます申上げますが、たつた今斯様々々云々、右御聞及びも有りませうが隣家大久保彦左衛門の狼籍、元來彼れ己れの明地をば取られたといふ少しは遺憾もありません事と推量いたします、何は兎もあれ泰平の世に武家やしきに發砲をいたし人命二人までを討取りますの段、此儘にいたしては何分棄置さ難ふございませぬから、是れより隣家へ參つて彦左衛門に面會に及び彼が言葉次第に由つて其儘にはいたすまいかと存じます甚だ失禮ではございませぬが斯様な小事にお構ひなく、折角用意いたしました酒肴を以て一献召上り下さいますし……これ奥お父様を御待遇申上る、家來共立願いで尾漏至極である、拙者はちよつと今の間に大久保やしきえ罷り越して……と押取り刀で息巻き荒く立上りました

桑あゝいや丹波殿、先やお待なさぬ御自分は此体を見て桑山が

大久保武藏鑑

自身隣家へ乗出て行ば理を以て非に落るといふ彦左衛門の巧の畏へ掛るも同様、是には意味深重なるとが在であらう彦左衛門とても發狂人にてはよも有まい、之は此儘に致して置て一應大久保方へ念を入れて問合して夫に全く違ひないといふ實地を探見め證據を上げて然して後に明日は早々御老若の會議にかけて恐れ多くも上さまへ言上いたし上意に由つて彦左衛門に處刑を與へ、當人は切腹とか家名改めとか重き御沙汰を仰せ付けらるゝは目の當たりして見ると最早彦左衛門は罪科極つた猪武者、其許は大切なる所の身分を以て其彦左衛門の所へ談判として自ら進むといふは甚だ以て宜しくない、不惑な者は二人の愛妾、御殘念ではあらうが敵は天下の法で取つて下さるから立願いでは宜しくない、神妙にいたして居られよ有樂は若年寄桑山左衛門尉でありますから共に狂人となつて騒ぎ立てるやうなことはいたしませぬ、川勝

丹波守も少しく逆上が静まつたに相見へまして丹波守は桑家へ参つて事の實否をば確かある爲早速使者をば立てませう桑夫れが宜しからう先づ夫れが穩かて宜しい」
是からいたしまして川勝丹波守の命令けで栗原友七といふ川勝の用人、なか／＼利口で分別もある男でございませうから此者を穩かに應對に遣わした栗原友七時を移さず隣家大久保屋しきへ来てつて案内を乞ひますると取次此趣きを承はり主人大久保彦左衛門に申すと彦左衛門 彦、あゝ隣家の家來が来た逢う取次ぎは面儀である使者の間へ通して置けと栗原を使者の間へ通す彦左衛門夫へつか／＼と出來りまして彦其方が川勝丹波守家來か友、御意にございませう彦名前は何んといふ友、栗原友七と申します御見知り下し置かれますやうに彦貴様夜中拙者やしきへ参つたは外の事ではあるまい川勝丹波守の機上へ鐵砲を打

込んで二人の妾を狙撃いたしたので多分は彦左衛門の業であらうと夫を聞に参つたのだらう然ふだらうと反對に聞れた

第三十席

栗原友七は少し呆氣に取られたが友へい如何にも仰せの如く夫れに相違ございませぬ主人丹波守申附に由りまして如何なる主意にて大久保彦左衛門殿斯る狼籍を働られしや大抵の事なれば彦左衛門殿の事故捨置きもいたさうが人命に係はりますこと幸ひ主人方御客來御上席として若年寄桑山公もお出でいありまして同公の御心添へもあつて彦左衛門殿の御主意を承はり來るやうと主人の使ひとして罷り出でました何うか御返答を伺ひたう存じます彦を、然ふか、確かめに來たんだ夫れは御急入りのことである然らば其方彦左衛門の返答を聞に参つたのだら

大久保武藏證

うが口で申ししたのでは跡でいつたのいわんのと争ふやうなことが出来て、證據に成らんから彦左衛門が一筆書いてやらう、ほんの投紙で分りさへすれば好からうから一寸待つて、忠助 忠はつ彦、和紙硯を持ってつ紙と硯を取寄せて彦左衛門さらく、と何やらん認める様子、宮城忠助が心配をいたしまして後から袂を曳いて忠、御前、御口上で直しうございませう、書た物は證據に相成ります減多なことを遊ばしますな 彦、黙止、云つたことは證據にはならん、いはんといへば夫れまでの事、書た物は後日の證據ではあいか忠、だから……其後の證據に相成りますから先方へ左様な物を書てお渡しなすつては不可ませぬ 彦、卑怯なことをいふな、どうも貴様は太平の世に生れて居るから兎角左様な卑怯な言をいつて不可ない……これ川勝の家來、乃公が直氣ではあるが例の拙文且つ文字も拙ない、是れで好からう 友、難有き仕合せに存じま

大久保武藏證

すも栗原が取上げて見ると

爲後日差入申す一札

其方屋敷高樓に居り候女を二人まで鐵砲にて打殺し候は吾等の所業に聊か相違御座無く候萬一遺恨に思はれ候へば拙者屋敷へ立向はれ候へば速かに勝負仕り可申く候

八月十五日

大久保彦左衛門忠教

川勝丹波守殿

と書つ放しにしてある 彦、もう何んにもいふには及ばない、是れを以つて行けば後日の證據になる、宜ろしいか、定めし手前屋敷も取り込んで居らうから早く歸れ 忠、委細承知仕りました彦左衛門から渡された書附を懐中にして栗原は己が屋敷へ立歸り此事を申しますと桑山も傍らにて承まわり 桑、まあ何んといふ奴だらう普通の者あれば理を非に曲けても己れが罪を掩はんといふ

通辭を構へる其所へ後日の證據になるべき書附までを送るといふは活潑といはふか亂暴と申さんか無法か馬鹿か理由の分らぬ剛突張りの爺い、是だもの御身が自身乗出して往つて此狂人を相手にしてまんまど首尾好く向ふを討止めた所が家改易、何んと言らんではござらんか穩かにし玉ひといふは此事、よし／＼明日に至つたらば順序を逐つて公地に達し不肖ながら桑山が縁ある方へ最負はいたさんが必ず此敵は取つて進せるから大船に乗つた氣で安心をして居さつしやい丹有難き仕合せに存じ奉ります、這座このあらうとは存じませぬ故御招待をいたし、飛んだ御配慮を蒙りました、さて今宵は悦ぶべき觀月の宴且つ新宅開きであるが婦人なりとも二人まで銃殺されたといふ、其所で遠慮もなく芽出度いと酒を飲んでも居られませんから桑吾等は此儘引取るから跡の取片附をいたして宜しからう愁傷の程察し入ります

ると折角準備いたしましたる山海の珍味も水の泡となり御上客が歸られましたから其他屬官の人々も手持無沙汰で悔みをいつて立歸りました、おかのよし、の兩人の親達には相當の金子をやつて内済にいたして相當の取片附をいたし追つて敵は取つて遣はすといふことで是も仕方がないから泣寝入り、翌朝に至つて川勝丹波守は御老中御月番大久保相摸守へ書面を持つて訴へ出でた、爰で御老中若年寄の會議に相成り、二代將軍秀忠公へ此段を言上いたすと、秀忠公も老中共より申達いたしたことを聞し召して猶又川勝丹波守の書面をも御直覽遊ばしました、將こりや其方共は此事情を何んど心得て居るか、彦左衛門を狂人とも見受けん、疑ふらくば是には仔細のあることであらう、己れの拜領屋敷と極つたものを是を川勝の爲に願ひの上とは云ひながら掠奪されたといふ内心憤り

大久保武藏鑑

を含み那の通り過なる老人であるから怒りの餘りに二人の女
を銃殺いたしたものがかも知れんけれども未だ外に仔細がなく
は叶はぬ何は兎もあれ太平の世に鐵砲を武家屋敷に打込み、二人
までの人命を絶つといふのは此箇條ばかりにても其儘にては捨
置き難い彼は小祿といひながら大御所公の御目録にも叶ひた
る舊士、今秀忠の代に至つて彼を罰するに申すのも先公へ對して
不孝の至りであるが何うか穩かに事を取鎮めるには彦左衛門に
切腹を申付けなければ相成るまいかと存する、是は老中共の取扱
ひもあらうから、悉く最負の沙汰なくいたして、相摸、其方儘く配慮
いたして呉れよ 相へゝゑ 將別して其方は大久保姓にいたし
て一門の附納であるから其方の論しは彦左衛門は承諾いたす
あらうから一應説得致して事穩便に納まるやうにいたしたい、左
もなき時に至つては又吹上評定所に召出だして善惡邪正を糺斷

大久保武藏鑑

いたさなければならぬ、其時は不憫ながらも家名改易免れざる所
であるから、相摸心得たか 相御懸ろの上意を頂戴仕り有難き仕
合せに奉存ります、御評定所御開廷の前に、然らば上意に由つて彦
左衛門屋敷へ罷り越しますのでございませう、是れから大久保
相摸守忠朝臣は駿河臺大久保の屋しきを差して参られたが彦
左衛門は斯まで騒ぎの大きくなつたのは少しも知らない、お客
一御本家の御入りといふ、一同狼狽をいたしまして、譬ひ一門に
もいたせ相手は十二萬石、堂々たる所の大詰候、此方は僅かに三千
石に満たざる旅本でありますから不時のお入りに遠くふためき
ますは尤ものこと、聽て書院へ御通し申す内に主人大久保彦左衛
門夫へ立出まして 彦いやはは、御本家、能こそ、御入來前日
に御沙汰も有之ませうなら不束ながら聊か御招待も仕るべきで
あるが斯く突然の尊來にては甚だ恐縮仕る、遊茶を一抔呈する事

も出来ぬ失禮の段何うか御許し下さい。相こりや、彦左衛門
其許は左様な沈み方では甚だ困る、既に其許が昨夜の狼籍公認に
達し上様殊の外尊意を痛させられ、直様御評定所御開廷にも相成
べきであるが格、外の御慈悲を持つて内實此相摸守へ御沙汰があ
つて宜しく彦左衛門を説得いたして穩に納めるには切腹を申附
たが宜からうといふ御配慮、相摸守御内意を奉じて是まで來つた
が、是までのことを是非か善惡を詮した所が益もないことで
あるから、これから先きのことを計畫いたさねば相成らぬ御自分
の心底は如何であるか、上さまの思召では不感ながら切腹申附け
なければなるまいとのこと、跡の所は老中共に於て宜しく計らう
旨もあるから御受をいたすか、其許の心底を打明けて申されよ、此
言葉終るを待つて彦左衛門からく、と大口開いて打笑ひました
が、彦は、い、いや御本家始めとして左様なことを仰せられるか

第三十一席

ら實困つたものだといふのだ」と少しも驚く氣色がございませぬ
是まで述べ來りましたる一談は大久保彦左衛門が全然狂人の沙
汰であります、けれども彦左衛門確と押へた所がなければ斯様な
亂暴はいたしませぬ、して見ると中々の才子、或時のことでありま
したが此人諸國の様子を見て置きたいと思つて薩摩の鹿兒島表
に下向をしたことがあります、其昔し薩州は他國の人は入れない
斯ういふ位嚴重な土地であつたのを彦左衛門進んで鹿兒島表に
參つて日向大隅薩摩の模様を殘らず見たといふ、夫も保養の爲で
はありませぬ、萬一の事出來の時地の利を知つて居らば大した益
になるであらうといふ、もう徐々天下は文弱に流れんとした時に
も此人のみは斯の如く心掛けて居られた

大久保武藏鏡

い、大高を領して居る仙臺公、千兩位いのお金子は何んとも思召し
なさりはしまい、彦去すれば直ぐ御當家へ御目に掛けないで那
方へ百枚の皮は御納め申しますから、何んでも早い方が宜しい週
れると仙臺は如何に大番とはいへ、豹の皮まで善へてはない、其が
爲め手間取れるのであらうと斯ふいはれますから、三日といふ日
限に三日目の夕方に参つては、耻辱に相成る、あゝ、漆石は大家だ、三
日の約束を一日目の朝持つて参つたして見ると、斯様に得難き品
も仙臺では善へてあることゝ見えると斯ふいはれます、左すれば
御當家の譽れと相成りませう、殿如何にも道理だ、金は今日下げ
遣はすから萬事宜しく頼む、彦長持に詰めて先方へ差送るやう
にいたします、もし此金を猫ば々にして向ふへ品物を送りません
ければ、欺偽取財で、殿まあ、然んなことは何うでも宜しい例
分頼むと彦左衛門千兩の金子を受取つて屋敷へ歸つて参り、長持

大久保武藏鏡

を出だして、何を中へ詰めましたかは存じませんが、充分に用意を
いたして、幸領が附いて早々芝三田の薩州の屋敷へ罷り越して、大
久保彦左衛門仙臺公の頼みに由つて、園基にお勝ちなすつてお取
りに相成つたる豹の皮百枚、献じに罷り越したといふ右の次第を
殿へ申上げたから、殿仙臺と照をして豹の皮百枚を取る約束を
して来たが、借はもう引けて呉れたか、三日間の約束をして来たが
三日立さる内に彦左衛門が持参いたして呉れるといふは、辱けな
い、有難は仙臺、豹の皮百枚の善へがあつたと思える、と早速彦左
衛門を奥の間へ通して、折しも御酒宴最中でございます、彦左衛門
夫へ來つてちよいと首を下げて、彦御機嫌お宜しう、昨日は園基
の勝負にお勝ち遊ばして誠に、や、恐悦至極に存じ奉ります、殿
こりや大久保、大きに御苦勞満足に存じます、昨日お前園基の中ば
に立歸つたやうでは、いか、彦はい、見て居りました、が、逆も仙臺

八十八
公の及ぶ所にあらず及ばざるを知つて見苦しく勝負を争ふ有様
賊の武士の見るに忍みせん所存途中で立歸りましたが跡にて承
はれば御前が卅二目のお勝と云ことでありまして實に御名譽の
こと戦場往來の掛引きも碁盤の黑白を争ふも其道理は同じこと
彦左衛門盡く恐れ入りました就ては彦左衛門今日は御約束の通
り豹の皮を持参いたしました、うぞ御受取り下さい殿あゝ實
に恐るべきは仙臺家じやなあ、世の皮を百枚も蓄へて居るといふ
は又別段あもの……彦何うして百枚所ではござらん未だく
五百や六百は蓄へ居ります殿ふゝん忠宗の家は天晴じや、いざ
戦といふ時は軍器兵糧定めし澤山蓄へて居ることであらう、一
を以て萬を知る奥床しきことにてある彦恐れ入ります殿先
づ今日に悠然遊んで往つて呉れますやう……彦左衛門に應
部を差出せ家來はつ薩州公は御悦び遊ばした金銀に積つて見

れば千兩だが碁で勝つて取つたといふのでありますから御自慢
莫人の御馳走を彦左衛門の前へ並べる、相も變らずがふゝむし
やゝ喰べて居ります、廊下に長持が据へてある殿様は見たくの
て見たくつて堪らない、然し彦左衛門が明けて渡すまでは此方で
手を注げることは出来ません、餘りに待たしうお成り遊ばしたか
ら殿大久保老人彦はい殿酒宴中にはいたして豹の皮を見
せて貰ひたいなあ彦あゝもう御覽に入る所ではございません
今明けて御覽に入れます百枚と申すのでげすから一通り數を調
べて頂きたい

第三十二席

殿あゝ好しく何分頼む彦左衛門袴の股立を取上げまして袴を
掛け永井兵助の居合拔といつたやうな形状で、何様仰々しい親父

だと思つて居る内に長持の緒りを拂つて忽ちの内に蓋を取り上
に掛つて居た芥除けのやうなものを取り 彦左様なら是へ出し
ますが少々芥が立かかも知ません 殿あゝ苦しうない、然し豹の皮
から芥が立つてといふのは可笑いな、何かがさく、音がするが何
んであらうと見て居る内に突然に米の俵を二俵出たがばた
と叩いたから堪りません、ばつと煙が立つ位までございます 彦
豹の皮一枚…… 殿何んだこりやあ……といふ内に又跡を出し
て、ばたくと叩いた 彦豹の皮二枚ばたくと 彦豹の皮三
枚と御酒宴の席へばたくと 叩いては放り出すから殿様も呆れ返
つて居ると 彦豹の皮四枚……五枚……六枚 殿これく大久保
老人こりやあ何んだ 彦へゑゝ、是が俵の皮でございます、豹の皮
八枚九枚……とやつて居る
薩州公は乾度面色を變へ玉ふて 殿、怪からん奴だなあ何うも、是

は其方の興かる所か 彦固より拙者が證人でござるから豹の皮
百枚御約束ゆゑ持参いたしました、是が俵の皮でござる、中に米が
這入つて居れば俵の實でございます 殿何うも老人には驚いた
なあ夫では全くの豹の皮ではなかつたのか 彦去れば如何に仙
臺が内福だからと申して日本に尊い豹の皮が百枚あるものでは
ござらん、又是を金子に直せば二萬兩や三萬兩はいたしませう天
下の諸侯が大金の品を賭けて碁を打つたとありましては他の聞
ゑも如何、俵の皮と申して米俵を取つた所が諸侯の慰みでござ
る、然るに本當の豹の皮でございと仰せあつてお願立あるとは大久
保彦左衛門甚だ其意を得ぬこととござるて 殿いや其方にはか
なはん然らば彦左衛門予の方が負て仙臺へ虎の皮百枚をやらな
ければ成らぬ節は其方何を持参いたす 彦左様でいよ、御當
家が負て仙臺へ虎の皮百枚を送らなければ……是も又得難い品

大久保武蔵鑑

だから本物は迎も揃せんに由て私は何も持参致しません 殿
何も持参いたさぬでれ済か 彦拙なれば済して御覽に入る口
といふ者がある以上更に驚くことはござらん、伊達家へ罷越して
何んにも虎ぬ皮と思召て下さいと是だけいふ、夫れで事は相済み
ます、七十七萬六千石の大名が全くの物を賄事いたしては相済ま
ん、御外聞にも相成ると心得たから豹の皮を持参いたすと申して
米俵を持参いたしました「暫くの間薩州公も呆れてお出なさいま
した」が 殿成程、こりやあ彦左衛門のいふ通り大々名たるべき者
が三万四万の金には非ずと雖も大金の物を賄けて碁をいたした
とあつては將軍家への間名も如何、豹の皮と心得へ米の俵を貰つ
た杯は後世の好い笑草である」と斯ふ思召しましたから 殿いや
一旦は欺むかれたと立腹いたしたが能く考へて見ると其方のい
ふ通り道理である、さ、一杯飲んで呉れいと却つて彦左衛門の頓智

大久保武蔵鑑

に恐れ入つて益々深き交りをつ結んだといふ去れば其後 彦何う
か島津侯の御領内霧島山天の逆鋒が見物いたしたいがお連れ下
さる理由には参りますまいか 殿あ、譯のないうこと、近々交体の
節一結に参るが好いと其所で薩州のお供をして日向大隅薩摩を
残らず半ケ年の間見物をして歸つて来ましたが前申す通り空し
く月日を費して見物をして来たのではない、成程、薩日隅は斯ふい
ふ梅垣もし一朝事あつたる時は此所から征込まなければならん
といふ研究に参つたので其所等に卒はございませぬ、皆是れ徳川
の爲に盡した人であります去れば本家大久保相摸守のいふこと
は少しも用ひません唯大口を明いて笑つて居りますに由つて大
久保侯も折角深切に来てやつたのに此親父と大層にお腹を立て
ました
大久保は大口開いてからくと笑ひ 彦いや、何うも御本家始り

大久保武藏藏證

として左様なことを仰せらるゝから誠に困る、泰平の世の中で何事もお目が醒めぬと見へる、少し何れも方のお眠氣覺しに此彦左衛門がやつた仕事だ、夫に御存じあは云ひながら上様までが彦左衛門に腹を切らせなければならん、杯とは情けあひ我身を振つて人の痛さを知れ、稍もすると腹を切らせなければならぬ、杯仰せがあるが然う無暗に腹が切れるものでない、中々苦しいものだ、自分の腹が切れるか切れないか考へて見たが好からう、今日まで生きて居たからもう拙者杯は命は要るまいと思召すだらうが是でも百までも九十までも生きたいのが人情、是しきのこと、腹を切る杯といふ、斯ふ間違つて居るから誠に困る、よし、彦左衛門登城の上こりや上へ申上げやう、相あいや扣へられよ彦左衛門殿、一旦罪を犯して相手方より願はれて其許は本来なれば宅番も申附けられて随分いたして居らねばならぬ、身体ではあいか、然

大久保武藏藏證

るに我儘勝手なる所の手前論を主張いたして、恐れ多くも上様へ拜講を遂げて申上げる旨があるとは怪からぬ事だ、又此相摸守へ對して左様な無法な返答をいたされる上からは是非に及ばん、最早御宥恕の道も絶へた、こりや御前御評定所へ御身も出頭するのは覺悟の上なのだ、らうから、然ふ取計らせふか、彦切望、然ふ願ひたい、將軍家御前たる御評定所に於て此裁判をすれば恐れ多くも上様の御耳に達するも必條、或丈け聞手は多いが宜しい、然ふして彦左衛門を御前に召されて一々御詮しあれば川勝丹波守屋敷へ鐵砲を向けたる理由明かに相成らう、人命二人までを取つたる一、後、覺ひないとは申しませぬ、自分が正にやつたといふ書附までを遣はしたではないか、何うか成丈け此事は大仰に秘密でなく、萬天下に廣告いたして宜しいやうな事件であるから、其お積りでか運びを附けさつしやい、御老中杯は然んなに々ずして居る理

由のものじやあない、はさくさつしやい 相「何んだ、これ御懇切の上意を蒙つて御内意を告げに参つて、且は一家の好意を以ていろく心配をするのに、ぐすくするなどは何んだ、然れば相摸守は是にて立歸る 查「お歸んなさい、御苦勞千萬、一日も早い相摸守忠隣朝臣に於ては怒りを含んで立ち歸られた查左衛門、後姿を見送つて 查「は、は、面白くなつて來たな、よし、何時呼出だしがあらうか」と只管是のみ待つて居りました 却中老大久保相摸守は最早有怨の道も絶えまして將軍家の出御を催し奉り、彌々當日と相成ると吹上御評定所を罷廷と相成つた、時の大老は井伊掃部頭直孝、老中列席は榊原式部太夫、酒井雅樂頭忠清、大久保相摸守忠隣、若年寄生駒讚岐守、桑山左衛門尉、土井大炊頭、大目附板倉重昌、御目付有馬澄俊、鈴木飛彈守其外の役人、御前

を守護いたす、何れも威儀を正しく扣へ罷りある、當日紀伊大納言尾張中納言、傍聽爲御列席を御願ひになり是も御前に扣へられました さて大久保彦左衛門は時刻違はず出頭いたして評定の御席へ進んで参り、其途中に於て彦左衛門夫れく役人に會釋いたしたが今日に限つては彦左衛門へ禮を返す者は一人も無く知らぬ顔をいたして居ります、彦左衛門は此体を見て中音に罵つていふには「彦は、あ、今日は天下の諸役人此彦左衛門を罪人と看做して此方から辭義を厚く拶揆をいたすのに誰一人答禮をする者がない馬鹿な奴等だ、善か悪か實か虚か分らぬ内に既に此身を罪人と思ふ人々の拙き最見、笑ふに堪へたり、あはつは、は」と獨言を云ひながら笑ひ出した一同是を見て「彦左衛門思ひ出し笑ひをして居るが何が可笑いか、悠氣な親爺だ」と呆れて居りました、是より評定

彦左衛門は懸てのことに己れの出頭いたすべき座へ進んで来る
 正面には御簾が垂れてありますから定めし上の出御と存じ、是へ
 對しては他までも禮儀を正して低頭平身いたす、其外諸役人へ對
 しても目禮をいたし着座をいたすと、酒井雅樂頭は言葉正しく
 いたして 雅、大久保彦左衛門 彦はつ…… 雅、其方近頃亂心い
 たし候哉去ぬる八月十五日隣家川勝丹波守邸内に發砲いたし猶
 又丹波守召使ひの婦人兩人までを銃殺いたし候段全く亂心に相
 違なきとのこと、今日は當公勤をお開きに相成り確と實否を取糺
 せよとの上意、右其場始末速かに言上いたして宜からう彦左衛
 門是を聞き 彦、仰せの赴き悉細承知いたしました、然し亂神者と

仰せあるは近頃御恨めしき御言、彦左衛門は確かに正氣にて罷り
 在る、尙又其當日川勝丹波守より家來を以て問合せ候時、毫も偽り
 なく妾兩人を銃殺いたしたる赴き書付にいたして後日の據證に
 も相成らんかど存じ、先方の利益を思ひ相渡しましたに相違ござ
 いません、抑々川勝丹波守が寵愛の妾であるか何んであるか其所
 は知る由もござらんが、是を鐵砲を以て止留めましたはこりや亂
 心でも何んでもない、上へ對しての御奉公、則ち君の爲になしたる
 業、夫を亂神であるの或は甚だしきに至つては彦左衛門に切腹を
 させやうのといふ御内意があつたさうで、誠にはや何共申上げや
 うもなき御事、今日は斯の如く公明正大なる御評定所御開廷に相
 成り御取調べと申すは彦左衛門の身に取つては晴がましき御事
 誠に大慶至極に存じます、又各々方は太平の世に成人つて今一天
 下の政事を握ると雖も、此事に就ての意味深長は御存じあるべき

大久保武藏鑑

咎もなく唯彦左衛門を罪人とのみ看做し玉ふから種々様々の御評議もあらうが是は勿体ないことではあるが上様へ直々に此事柄を言上いたしなば賢明なる上様よも邪が事とは思召すまいかと存ずる、こりや酒井殿に願ひまするが御質問御無用お調べ彦左衛門上様へ直さく申上げたいことがござるから此事御採用に相成らぬ内は今日の御評定所は無益であらうかと存ずる、取次を願ひます「仕方がないから酒井樂頭暫く扣へられよ一言を殘して御前へ罷り出でまして伺ひを上げると、二代公御前に相成つて秀苦しうない彦左を是へ呼べ雅は「あ」といふ御答ひをいたして元の座に就き雅彦左衛門格別の思召しに由つて直さく言上を御許し下し置かるゝとのこと、隨んで御前に出られよ彦有難き仕合せに奉存ります、左様無之くては叶はぬ事である然らば御免候へ……」と何やら彦左衛門首に掛けたる物を取

大久保武藏鑑

下して是を小脇に挿込んで、つかく御儀の傍らまで来りますと將軍家御言葉はございませませんが彦左衛門の出で、平服する体を御覽せられまして泰然と御扣へある願てのこと彦左衛門件んの包みの内からいたして取出だしたは色々の書類悉しく右の手に捧げ彦恐れ多きことに候へ共上様には是なる御書物尊覽の程を願ひ上げ奉つります、篤と御一讀の程を下し置かれなば彦左衛門が此度の所業、全く公儀を憚からざる無法か但し精神削れてなしたるか是等も御分りに相成らうかと存し奉る、と彼品々をば將軍家御前へ差出だすと、秀忠公に於ては其書附を取らせられ中を御開きなさらうとすると、不圖お目に留つた文字があると見へてはつと押戴き玉ひ、傍へある御臺の上には是を差置かれ秀こりや、嗽ひ手水の用意に及よべといふ上意は「あ」とお側衆がお答へ申上げる間もなく清き水を汲み

大久保武藏鑑

して御嗽ひの用意をいたしませずと、將軍手洗ひ口嗽き、御身を清
遙かに日光山の方に向つて何やらん御祈念あらせられたは、何

秀忠公悉くしく左衛門の擲けたる件んの書類を悉皆お開きに
相成つて中を御一覽あらせられたが上包みには

慶長十六年九月二日永井下總守承之

と書いてある、其内に家康公の御直筆があつて不文ではあるが
吾等鷹野に出で其道の歸り大久保彦左衛門宅に立寄り暫く休
息の節庭内に松一本あり是を見るに此松大いに見所あり吾等
も松平なれば此松を汝に預け置く看よ此松年を経て繁盛いた
しなば我家も共に榮へん由つて此松大切に相守るべし、奥行き
百七十間間口五十間の場所永々其方屋敷地に遣はすものあり
依て如件

大久保武藏鑑

其傍に家康公の狂歌二首

徳川の水たまりある大久保に

忠教住めばどもに家康

大久保の松の一木の葉末にも

變らぬ千代の汝もりせよ

代々の將軍之れを粗末にすべからざる者なり

五月二日

家康判

大久保彦左衛門殿へ

と走り書ではありまするが斯く御丁寧ある御教書を賜はつたも
のと相見へます、又一葉の書面は其文に曰く

此日は慶長十六年五月二日駿府より江戸表御巡見とて御鷹野
遊ばさせられ御歸路彦左衛門邸に御立寄り一條の松を御覽遊

大久保武藏

ばし彦左衛門に此地所を拜領仰せ付けらるゝものなり
五月二日

百四

大久保彦左衛門殿

小笠原掃部頭判

又一通

儀は兼て荷めならぬ大切なる事なれば町事に心を付けられ
松の二葉は緑の林變らぬ千代の末までも大切になし常々鳥類
の留らざるやう心得の爲鐵砲を許し置かるゝものなり
五月二日

本多佐渡守判

大久保彦左衛門殿

して見れば大御所家康公の御教書當日御供の役人本多佐渡守小
笠原掃部頭が添書までをいたしたものと相見へます、是を繰返し

大久保武藏

繰返し御上りあらせられました二代公に於ては 秀「こりや彦左
衛門此事は今日まで予は知らざるに由つて大いに不都合なるこ
とを申出だしたり予さへ斯の如くなれば先君より下し置かれし
御墨付、汝か手にあることを知らざる者も多からん、秀忠存せぬ事
とは申せども粗忽の振舞をいたしたり……こりや今日列席の大
老中老諸役人は是へ來つて松の由緒を拜見いたせ 一同「は、あ雅
樂頭忠清、恭しく手に取上げまして一同へ是を拜見仰せ付けられ
る、徳川家の堂々たる重き御役人皆一同是を見て何んと言の申
すべきやうもなく又論を爲やうといふ者もなく唯恐れ入つて控
へて居る。て彦左衛門御座の中央に厳しく座を構ひまして 彦「何
ん各々これにても某しが亂神いたせしか辱けなくも東照神君
より斯の通りの御墨附を賜り直ちに鐵砲を許しに相成つた
左衛門、彼松は鳥も留らぬやうにいたせと本多佐渡殿が御前に於

百五

て御立會の上別書を認め置かれしは後世の爲、大事にかけて彦左衛門が多年の間守護いたせし松の大樹、此松の大樹は則ち御代々の大樹公が御榮へ同様とまで御意に相成つたる尤も尊い松の木へ勿体至極もなき女の身と爲て高樓より眼下に見下すさへ無禮なるに己れの月見る邪魔ありと汚れの紙を玉にして投付けるとは無禮至極、見棄て彦左衛門其時は心中燃るが如く怒りを發し、吾を忘れて鐵砲にて二人の女を打殺したに違ひない然し今考ひて見ると少しは不慮と後悔はいたして居る

第三十、四席

彦、今老ひて見ますれば鳥獸同様なる女奴等を銃殺せずとも好かりしと少しは後悔もいたしたが出来たこと故是非に及ばん、是にて次郎も水解いたしてござらうが、斯くまで尊い件んの松を役人の

の權威を以て普請の罪歴になるから伐木すべしなぞと願ひ出でたる川勝丹波、是を補助つ役人も知らぬこと、は云ひながら腰抜けにも程がある、又要らぬ明地であればとて川勝丹波の願ひを容れ、上の威光で拙者の方を屈服させ、丹波守に貸渡すとは、お役人の少々取計ひも其意を得ず、随分彦左衛門が手前勝手な過激なことをいたしたやうではござるなれど之れでも御法に背くといつて此彦左衛門を罰し玉ふか、如何でござる」と例と大音を上げて御座中へ響き渡るやうに尋述いたした、すると將軍家はれを聞き召されて、秀、こりや、彦左、唯今汝の申す如く一々尤もに聞届けるが、是は尊き松の由来、何とて今まで一言も其事をいはず又川勝の請求に由つて汝の地面を取上げて彼に貸渡す時も穩かに承知いたして普請成功いたするまで、何事も面に出ださずしか、何か仔細のあることならん、是は何じや」と秀忠公が彦左衛門に少しく御

大久保武藏鑑

其御不審は御道理千萬上に於ても其邊に御氣が注かるゝから
は今日列席の諸役人、願人川勝もなせ今まで一言もいはざりしと
不審を立てるは道理なれども是は少々手前勝手、熱々思慮を巡ら
すに某しも永い間の拜領屋、追々家が破損いたし近々に根次を
するか普請を爲替へなければ、逆も住へさせん、斯く申上げるは不
足の間敷いことなから小祿の産左衛門、身上軽き身分、屋敷の普
請をする所では、早く見苦しきを其儘にて年月を送り罷り在りま
した、が最早餘命もなく何うか一生の内には消き檜作り座敷へ
住つて大往生を遂げたいといふ是のみが望みでございます、然れ
ども薄祿なれば如何共いたし方のない所へ幸ひ隣家の川勝丹波
守、此産左衛門の明地に見込みを付け上へ願つて、權柄で眞桑山左
衛門尉殿の盡力からとう／＼己れが手に入れて普請をしたいと

大久保武藏鑑

いふ彼が存念、是ぞ幸ひ時に取つて産左衛門の利益と川勝の勢
を充分に成功さして末は産左衛門が横取をいたして呉れん見込
みを立てましたる今度の催し、斯く申すと何か産左衛門が人の普
請を奪ひ取り、盜賊に等しき、邪非道と又御議論もありませうか
れども決して然ふではない、人の非を發くは聖賢の道には違ひま
すが元來川勝丹波守は去年去々年二ヶ年打續いて、彼は勘定奉行
の權職を帯びて居る内に諸國を巡見いたし、大名成ひは百姓の家
家より苞苴賄賂、充分に取り數萬を成に蓄へ居ります、則ち
不義の富貴を食ふ、其川勝の蓄財家なることを知つて充分彼
に金子を遣はせ結構なる普請をさせ其跡へ某しがのこ／＼と移
り住み思ふ存分贅澤をしやうと最初より心注いで居りましたか
ら態と承知をいたして何んにも申しません、彼正路潔白の武士に
して正しく蓄へたる金子を持つて作りましたる家なれば何とて

大久保武藏鑑

私しが斯様なることをいたしませう、川勝如き不義の富貴を得て
居る者の拵ひた家を奪つたとして決して罪も報ひもあるまいと存
じます天から授かつた賜物といつて然るべくかと存じます、東照
神君が恩賜の家、手前理屈に似たれども能く御覽察の上前後
御考ひ合され、戦場の分捕功名と召思され、川勝丹波守の出来の普
譜は残らず彦左衛門に是を賜りたし、去すれば別段御褒美にも及
び申さず、何卒右お取計ひ宜しく願ひ奉る」と斯の通り彦左衛門が
述べた、秀忠公にこゝお笑ひ遊ばしたが「ま何んといふ話いだ」と
思召して「秀こりや列席の役人共彦左の申する所も面白い願ひ
であらうと存するが多く罪人を出すも望ましからず、如何いたし
たものであるな
二代將軍彦左衛門の一言を聞遊ばして尤もに思召したか、秀
是は老中共、川勝丹波の屋敷は悉皆過料といたして取上げ、彦左衛

大久保武藏鑑

門の方へ與へた方が好からうと存するが如何、老上意の趣き委
細畏まり奉りましてございませう、左様ござらば彦左衛門に拜領仰
せ付けられますや如何取計ひませうか、秀彦左衛門に取らせ
る、老は、あ、彦左衛門改めて川勝丹波守の新郎、上より賜はると
のことであるから有難く存せいで、彦左衛門は有難き仕合せに存じ
奉る望み通り成願いたしまして彦左衛門今日程心持の好いこと
はござらん、秀こりや彦左衛門、此上共に世の中は追々太平に進
歩いたす、天下泰平なれば従つて又弊害といふものも出来て参る
ものであるから其方萬事心を配り萬一役人共の政事に違ふたる
ことある節は理非明白に政事へ口出しをいたして宜しからう以
來汝に政事の助言役申附ける左様心待候へ、彦左は、あ……好い
所へお氣が注かれましたして誠に結構至極、ちと彦左衛門へお頼みが
お手遅れかと存じます、が明君なればこそ好い所へ御心注かせ

大久保武藏 鑑

られたり……こりや御役人中、聞かるゝ通り上より唯今直々の上
意、以來は彦左衛門が御政事向きへ口を容れまます彦左衛門が政
事へ口を出せば此度のやうな不都合はない、今日のやうに各々方
に目がなくつては天下は累卵の如く、是よりちと都てのことに目
を明かつしやい第一天下の役人たるべき者は、慾にいたして活
眼を開いて居ねば成らん、役向を選み好みをする風あれども決し
て役は還ぶべきものならず、各々方が役向きを選ぶといふは畢竟
權威を振ひ、其身の光榮を思ふが故のみ、夫だからだんく増長を
すると賄賂苞苴に心が傾くといふ識らず知らず不義者に相成る
のであるから以來は性根を入變て上へ御忠節、聊かも私なく不
義の富貴をば好まずして飽まで御奉公いたして然るべく、あゝ天
下泰平是にて彦左衛門も何時目を睡るとも思ひ残すことは更に
あしあはゝゝゝと大口明いて例の高笑ひ

大久保武藏 鑑

將軍家を始めとして水戸紀州の御兩家及び列席の大老老中若年
寄に至るまで煙に巻かれて一同御世長久萬々歳を祝し奉り其日
は夫にて皆退散をいたしました、翌日に相成りますると桑山左
衛門尉に於ては思召有之り、役御免、川勝丹波守は新規普請いた
したる屋敷お取上げに相成つて願ひの通り彦左衛門に賜はると
いふこと、彦左衛門家内の者家來に打向つて彦さゝ是れだから
乃公が温順しくして居たんだが、見ろ立派な家が天から降つて來
た、一同悦べ用人が何うも御前のお計ひには恐れ入りましたが餘
り風が惡る過ぎるではございせんか彦さゝに風が惡いものか
忠義正直な者はいちめさい、あゝいふ我儘横道者は乃公のやうな
者がいちめなければ下々で何の位の難澁をするかも知れない、何
しても松が御本尊様、一層大切にしなければならんと猶更松を大
切にいたしまして、幾千代變らぬ松屋敷、駿河臺錦の小路の古蹟に

百十四
残つて居ります、或る一説に川勝は大坂の役人の軍功を盗んで己れが出陣をなし彦左衛門が其證據を擧げて之を上へ訴へ、愛妾二人を斃された上に己れの家も断絶したとございます其は附會の説にして決して然ふではありません、維新まで川勝といふ敷が立派に小石川に残つて居たのを以つても知るべく、先づ大坂保彦左衛門松屋敷の講談は豫じめ右の通り次回よりは又々彦左衛門の逸話を口演して、夫から何か面白いみつちり實のあるものを演じませう

第三十五席

川勝松屋敷の一談は前回を以つて結局と成りましたが、是は前圖よりは遙かに後の事にして西九大納言か三代將軍家光公と成らせられてからのこと、此家光公は初代二代の古例を破つて徳川十

五代の基礎を堅めた方だけに、又中々勇猛活潑にして家來の目に餘るやうな我儘もあつた、他人が是れを意見をするとお氣に觸ります、彦左衛門が出れば、家、何うも仕方がない三代の忠臣と思召して入つしやるから怒る御氣色もありません、或時老中の内田信濃守より家光公に希代の梅を一鉢献上をいたした、將軍家へ奉る程の梅でありますから大晦日の晩に市で買つて來たのは大きに遠う三代家光公大層此梅を愛して立派な鉢に仕立て朝に夕べに眺めてお出でなさる、終に自ら此梅に札をお立てなすつた、木村梅といふ銘を打つて亦別に其傍へ

家

光

と御直筆だ、木村の梅とは申すまではなければ、大坂合戦の時、河

内若江に於て討死おしたる木村長門守、徳川家から見れば敵ではあるが智仁勇兼備の名將、家康が敵おがらも重成の死を聞いて涙を流たといふ、其れを家光公が聞いて居て御存じだから斯くは梅へ付けましたもの、御覽のない時は四人の御坊主が預かつて居る花一輪落しても曲事といふのだから命掛けで、去れば花が何百何輪あつて枝が何ういふ風になつて居るといふことがちやんと書上げになつて居て風の爲に一輪散りまして右の次第をお願け申すやうなことでお坊主も此梅の爲には弱つて居る、もう當分が梅の番に當ると青くなつて梅の四方へ一人づゝ付いて様子を眺めて居ります、すると「彦左衛門御前に罷り出でました 彦左衛門しき尊顔を拜し恐れを申上げます 家、あゝ彦左衛門見へられた其方もいつも變らんで芽出度の 彦、へゝ私近頃風を覺へまして誠にはや鬼の鶴亂とやらで氣に變はりはござらんが意氣

地がなくなりました 家、左様かな大事にいたせ 彦、有り難き仕合はせに存じ奉つる 家、時に親父好い所へ参つた、其方に見せるものがある 彦、はゝあなにを見せてくださいますな 家、これ近習でも梅の間へ親父を案内して予が秘蔵の梅を見せてやれ 彦、近はつ 彦、梅……夫は結構とれ、拜見いたしませう爰で御近習が梅の間へ案内をして呉れる、彦左衛門すいと中へ這入つて見る、と正面の所に臺があつて其上に梅が揺へてある、お坊主が四人東西南北にちよきんと座つて青くなつて番をして居る 彦、やゝ好い梅だ各々御苦勞 甲、これはこれは大久保様何時もお達者で……彦、あゝ有難ふ是かい上様が御自慢の梅は……成ほど、うむ…… 乙、いゝ…… 彦、然ふかい、ふん……ちつとも句はんせ 中々能く句ひます 彦、然ふかい、ふん……ちつとも句はんせ 尤も風を少し引いてるが句ひに差支ひはないのだが、貴様達は此

大久保武藏燈

梅の四方へ何んだつて仰やくしく座つてゐるんだ 甲「へい梅の番を
して居ります 彦此番をいたすのか 甲「左様で……彦夫りや
あ怪からんこつた 甲「然んなに傍へお寄んなすつては不可ませ
んもつと退つて御覽に相成りませんければ成りませぬので 彦
ははあ、何かい此梅は傍へ寄つて見ては不可んといふ御法なのか
い 甲「左様で……彦御法だ……誰が極めたのだ 甲「上様が……
……これ御覽じろ此通り御直筆の札が立つて居ります 彦ちつと
も知らなかつた、とれく……此りやあ大分六ヶしい事が
書いてあるな、此花を一輪でも觸つて落したものは曲事申附ける
と斯ふいふのだな 甲「さ左様で 彦大層もない梅だ、うむー木村
の梅か、木村の梅は面白いな
彦然らばもつと拜見をしやう、全体此りやあ誰が献上をしたんだ
い此梅は……坊「左様でございませす、内田信濃守が献上をなすつ

大久保武藏燈

たんで 彦流石は大名の献上した梅だけあつて高大もない梅だ
坊「もしく大久保氏然ふ傍へ寄つては不可ません 彦なせ傍へ
寄つて不可ないのだ、もう年を取つて目が掠んで居るから傍へ寄
らなければ見へない、香ひもしない、上様が能く見いと仰しやつた
から傍で能く見なければ思召に背くといふものだ 坊「不可ませ
んよ老人、傍へ寄つて一輪でも花をお落しなされば曲事に成りま
す 彦まあ黙つて居さつしやい」と何んといつても聞容れません
彦々傍へ寄つて 彦あ……結構なものだなあ、梅といふものは
聖人の好むものだ、唯散り際が悪いといふので櫻を以て王として
あるが乃公にははせると花は梅の木人は武士だなあ、第一鉢が大
したものだ、うむ成ほど、青磁だな拙者なぞが此位の鉢を一つ買
うには屋敷中の物を残らず賣つて仕舞はなければ買へんて、安くな
からう好い鉢だ、然し何うも匂ひがない 坊「貴郎の鼻は何うかな

すつて入つしやるので此位い句ひが高ひではござらんか 彦貴
様達には句うかも知れんが乃公には少しも句ひはない全體私
は好い句ひは少つともしないで火の中へ毛一本落しても嫌な臭
氣は直ぐ鼻に這入る 坊「恐ろしく意地の悪い鼻で 彦、あゝ意地
の悪い鼻だよ、あゝ香はない」と手を出して突然花を一つ摘んで取
りました 坊「是は大久保老人怪からんことをなさいます、何を遊
ばすので……」 彦「黙つて居ろ、折角此所へ来て梅の香りをかゝな
ければ拜見した甲斐がない」と摘つた花を鼻の穴へ押込んで「彦
成程鼻の中へ入ると少しは香ひがする 坊「怪からんことをな
さいます、譬ひ大久保老人と雖も私共は役目を以て斯く守り居ま
す、然るに其守護して居る役人のいふともか聞容なく斯る無法を
遊ばすとは以ての外のこととござる 彦「ではあらうけれども香
はないから據ろない 坊「出羽でも奥州でも餘りといへば無法で

ござる上へお届けに及ばなければ成ません 彦「待てよ一輪取
つて届けられる位なら二輪三輪取つても其罪は同じだ、もう一
つやらう 坊「不可ませんといふに……」と止める内に又一つ摘ん
で今度は左りの穴へ押込み 彦「あゝ、好い香ひだ、待てよ、此枝振
が少し面白くないな、此れが一本右へにゆと出て居るので風致が
悪るい植木屋ではないが直してやらう」と云ひながら最も大いな
る親枝をびよろりと折つて花をきゆいとこき落した傍若無人
四人のお坊主目の色を變へて大いに驚きまして 坊「なゝ何をな
さる花一輪落しても罪があるので、其が爲に私共が斯様に控へて
居ります、然る所へ貴郎がお出でますつて斯様なことをなされて
見ると吾々は切腹でもしななければ成りません 彦「お前達に切腹
をさしては誠に彦左衛門が氣の毒だ……」が然し見るといふ上意
を察つたに由つて心の儘に是を見る、先ず「安心さつしやい」と

鉢に残れる梅の枝を殘らずびしく折つて花をこいたから薪と
差したやうに成りました
大久保の亂暴捨ては置けんによつてお傍御用御取次松平播摩守
に此由申上げたから播摩守も大きに驚き上様へ言上に及ぶと烈
火の如くに憤り玉ひ家彦左を是れへ呼べ何事も差許すの
を奇貨として、主の珍重いたす品を損ふとは怪からぬ親父、速に是
へ引來れつといふ鶴の一聲、彦左衛門に是をいふと少しも驚く最
色もなく彦左、左様かど從容として御座近くへ進まれた彦
召ましてござるか家彦、彦左其方は何をいたして居つた彦
上様御秘藏の梅を手折りましてござる、那の鉢に御直筆で立つて
ある通り誤つて一輪落しても曲況んや私しは夫をして誤ら
ずして梅を手折ました上ははや御手討と心得居ります

第三十六席

彦左衛門は尙も膝を進めて彦左、上様御直筆にて曲事であると
認めてありますから私だからといふて天下の政道を曲げるこ
とは出来ずまい、又御高札の通りに遊ばさなければ御政事が立
ちませぬ、お手討に遊ばしませ家彦をいふにや及ぶべき如何に
も予が今日は手討にするから左様心得ろ彦左、固より彦左衛門此
期に及んで一命を惜みまするものではござらん、さあお手討に遊
ばせ家彦、其方が左様申さいでも今首を刎ねて遣はす傍らに控へ
て居つた播摩守、心配をして播夫れは大久保老人お宜しくござ
いますまい、御身のやうにいはれては却つて上の御意に逆らうと
云もの、御詫をなさい、餘人ならぬ老人のこと御詫をなされば御許
しがあるに相違ない、跡の所は吾々共好しなに御詫を致すから

大久保武藏鑑

彦、御深切居けなすが御乗置き下さい曲事に成ることを知つてい
たして今更に御詫をするやうな卑怯な彦左衛門ではござらぬ唯
尋常に上様の御佩刀に掛つて往生をすれば好いのだ。家播磨、捨
て置け。婿は、あ。家坊主、其梅を鉢の儘是れへ。坊はつ……運
んで来たのを見と梅だか薪だか分らない植木鉢の中へ黒岩を立
たやうな物。彦は、は、は、もう斯ふ成つては何んのお役にか立ち
ませうと差してある札を取つてみしりみしりと折り上様のお膝
の所へぼんと投出した、腹を立つて入つしやる所へ重ねくの無
慮であるから彌々上様に於て憤りを増し玉ひ。家、己れ彦左衛門
もう、勘辨成らぬと仰せられて御佩刀の柄に手を掛け玉ひき
らり放さんと遊ばした
最前より傍へに控へて居りました諸役人に於ては大きに驚き職
場生残り徳川三代の忠臣も今や爰に於て最後をするものであるか

大久保武藏鑑

と手に汗を握つて控へて居りました彦左衛門は従容として恐る
ゝ氣色もなく彦、あいや暫くお待ち下さい此場に臨んで決して
言譯などは仕りませぬが僅た一言伺ひたきことござれば暫時
御控へ下さいまし、仰ぐ臣の身は君にあつて私になく老人平助は
昔し垂髫の頃より神祖の御供をなし奉公をなし今日まで上格
別の思召を賜はり然るに唯今測らずも上のお言葉に背き御秘藏
の梅を散らしたりとあつてお手討に相成るは是れ御道理もし私
しをお助け下し置かれたなれば天下の政道は依怙と相成り國政
亂れて立ち難く未だ豊臣取立の者も多く天下太平とは申しなが
ら諸侯徳川の様子を窺かに窺ひ時としては血腥き風の吹きます
る折から如何なる事の起らんも知れず由つて謹んでお手討に成
ります、いさお切り下され然し彦左衛門臨終の際に冥土の土産伺
ひたき事と申すは如何なる次第で彼の梅を木村の梅とは御名付

大久保武藏鑑

遊ばせしか伺がひまして冥土に参り東照神君に言上仕まつりた
し家彦左木村の梅と申すのは大抵其方は推して居るであらう
豊臣秀頼柱石の臣木村長門守重成茶臼山に御判見届けの大役を
済せたり且つ大坂落城の折河内若江表に討死をなす前夜に至つ
て誓の中に名香を焚込み美事に討死さて首實檢に備へたる時に
祖父様のお言葉には惜き武士は重成である柳の枝に櫻の花を咲
かせ梅の葉を含ませたるやうなものじやと仰せられたが是は能く
衆人も知る所是等の所から木村の梅といいたしたのであるが予の
誤か彦其木村重成はいづれの家來何れの忠臣にございますか
伺ひます家去れば秀頼の臣……彦それ御覽じろ彼は内大臣
秀頼を輔佐して大坂に止まり關東御人數に對して數々抵抗をい
たし申すも恐れ入つたることなから木村重成の爲に討たれし事
も度々あり取分け眞田幸村の息大助幸安と共に烏海村の城内よ

大久保武藏鑑

り抜穴を括つて神君かお手先を破りしは能く人の知る所何も敵
の名前をお認めに成らずとも御味方の内で木村に劣らぬ者の名
をお付け遊ばせば宜しいこれ彦左衛門が心に叶はぬ一でござる
かこれ御風流の名前なれば格別木村の梅とお付け遊ばしては
是れ味方を遠けて敵を近付くるに當りますかと存じます又お立
て遊ばしたる此札に誤りて花一輪散したりと雖も曲事たるべき
ものとしてあります花一輪散しても實以て万物の靈たる人間
をお切り遊ばす思召してございますか一本の梅の木は愚か万本
千本たりとも梅位いの爲に人命を取るといふは甚だしき思召し
遠ひ况んや花一輪を落して其者に處刑仰せ付けらるゝといふは
御村の惡逆にも勝るとも劣らず甚だ以て彦左衛門の意に叶ひま
せん斯る思召しを以て此一天下をしるしめさば諸侯徳川に背き
再び元龜大正の亂を見るや必せり私今日お手討に相成りますれ

ば泉下に在する日光標の...に出で右の次第を申し上げまする心
 得、さもう言上することとはございませぬ美ん事すつぱりお切り遊
 ばせと首を差伸ばし悪びれたる体はなし
 家光御眼を閉して黙然として在したる頼あつて儼然として悟り
 玉ひ家あゝ一誤つたり迷ふたり許し呉れい、彦左衛門、木村の梅
 といたせしは敵味方となく予が弘く賢者を尊ぶの意から出たの
 だが成程を其方に然いわれて見ると面目ない許せ彦、這は怪か
 らぬ事を仰せられます、將軍家一度仰せられたる事は驕馬も追ひ
 難ふとざる、斯ては天下の御政事が立ちません、さすつぱりとお切
 り遊ばせ唯今申せし事は私が命乞の申譯ではあります、お切り
 遊ばせ……家、いやもう手討にするには及ばん、左様な理屈を申
 さいで勘辨して呉れ予が詫る彦は、いや、いや御明君々々……
 左様なれば正直に申上げます、唯今のは彦左衛門が散したので

はございませぬ家、然らば誰がいたしたのじやな彦、去れば、花
 に嵐、といふことを申しまして兎角梅の時候、から櫻の咲く頃には
 時ならぬ大きな風が吹きます、右嵐が散しましたのでござる家、
 うむー花は嵐が散したかも知れんが枝を折つたのは彦、大きな
 樹ゆへ雷が落ちまして枝を殺ぎました家、左様な、いや嵐や雷を
 捕へて手討にすることは出来まい、最早夫れで宜しい、傍らに聞い
 て居られた御近習の面々甲、那りやあ彦左衛門が爲たのじやあ
 ない、嵐と雷の仕業だもよ乙、旨く逃げやあがつて平生ながら彦
 左衛門に逢うと上様は馬鹿にされ放題、何しても口も八丁手も八
 丁恐ろしい爺の様だ
 上様ははつと云ふ息を吐いて家、最早斯ふなつては咎める所は
 ない爺父は早々引退つて宜しからう彦、然し花の散りましたる
 鉢を剛様な場所へ置くといふは家、早々取捨てる彦、此鉢は彦

左衛門拜領いたしませう誠に披目のない爺父で何んでも貰つて
往て仕舞う然しながら上様は御心の内に家にはあ彦左衛門と
云ふ奴は蒙の奴だ子が愛する爲に嚴しき札を立つて誤つて之れ
を散らし之れが爲に多くの者が難義を致するを大勢に變つて彦
左衛門が落花いたしたに相違無い向木村の梅に就て意見をする
處を見れば何處迄も徳川の爲に盡すものと相見へる彦左衛門は
忠義な奴じやと思召して之れが後になりまして木村の梅の一席
語り相なりました

今一つのお話しは茲に京都所司代稻葉長門守御老中筆頭松平伊
豆守を助けたるお話しがあります之れを五色の鳥と云ふお話し
が餘事に渡り升るやうで御座い升が一す面白のお話しで御座い
ますから申上げて置きますが九條關白殿の姫君が紀州中納言殿
へ御輿入れに相成る御約束が出来まして之れは所司代長門守殿

のお骨折でありまして昔しは此京都より御籠中を迎へると云ふ
のが誠に自慢で御座いました來年御輿入れに相成らうと云ふ其
前年であさいました所司代長門守へ九條殿より御沙汰に相成
りましたのは彌々關東へ下向を致すに就て何か諸道具も關東に
て笑はれざるものを作つて遣したいが少し頼みがあるがと旨送
つて來りました

第三十四席

取分け小道具八つに掛る八枚の帛には江戸八景を一つづゝ書工
を運んで書したいが然し芽出度の書工を選んで書せるといふこ
とになりましたが芽出度の書と申せば高砂だとか、蓬萊だとか又
は伊勢の二見ヶ浦といろくありませすが芽出度の書工といふと
誠に六けしい年を老つて居るばかりが芽出度の書工ではない、雨親

大久保武藏證

百三十二
が描つて品行の正しい血統の正しい者然し左様な書工は澤山は
ない書が上手なら品行が悪い品行は正しいが書が下手だとい
つたやうな形ちで然るに此頃旗本の内に近藤秀山といふ書工が
ある旗本だから書工といふのではない唯ほんの慰みにやるのだ
が誠に上手秀山では人は知らないが本名は近藤登之助大した家
柄旗本の内でも辭々たる者であります九條家で此事を御承知で
ありますから所司代長門守に御依頼に成つて何うか近江八景の
内粟津の晴嵐を江戸表の近藤秀山に描して貰ひたいとある長門
守是を了知して長左様なる品を描くは定めて當人も悦ぶで
さいませう委細承知をいたしましたと受合つて直ぐ江戸表へ御
沙汰と成る上より老中松平伊豆守殿へ對して近藤に申附けると
いふ其所で伊豆守も是れは近藤が悦んで描くであらうと早速迎
ひにやりました

大久保武藏證

百三十三
近藤登之助老中役宅からの使者はて何なるかと伊豆守屋敷に
罷り出る正面に伊豆守控へられて伊を登之助か能う参つて
呉れられた近う如何程近藤が旗本で威張つても老中の威權
には叶はない登恐れ入ります今日御使者何用にございます
か伊今日登之助其方を呼出だしたのは餘の儀ではない平生よ
り其方の品行正しく且つ書を以て天下に名譽を博して居る由つ
て其方が彌々天下に名を揚げるやうな有難いことを申附ける體
んでお受に及ぶやうに登はて何かは存じませんが天下に
名を揚げるといふは武門の道に於て此上もあき有難き仕合せ抑
は何事にございますか伊いや外ではない此度京都所司代稻葉
長門守より申來るには紀州殿と九條家と御婚儀取極まり由つて
姫宮關東へ御下向就て小道具に掛る八つの御帛夫に近江八景を
一景づゝ認めることに成つて中にも粟津の晴嵐は八景の内最

たるものである、是れを其方に書いて呉れるやうと九條殿より長門守へお頼みに成り、長門から江戸表へ申送つて参つた遣は實に名譽のことであるから謹んで描くやうに御用は追つて此方より相届ける左様存ぜい悦んで御受に及ぶかと思ひきや登之助づいと御を上げ 登是はく御支配、何御用かと思得たるに拙者に粟津の晴嵐を認めて差出だせ、名譽であるの天下に名を弘めるのといふ仰せでございませすが如何様京都に於て最も御家柄たる九條關白殿下の姫宮が紀伊家と華燭の大典を擧げられる、其お道具に掛る御用、御名差にて某しへ書を認めるとの御事、實以て名譽有難く御受は仕りたいが、然し唯今の仰せで見ると拙者にはちと御受が出来兼ねます、思召しの程は辱けのう存じますが何れの戦場に魁けを申附けるとか、何所の合戦に後殿を申附けるとあるなれば武門の身として悦ばしく御受を仕るが元拙者は書を以て業と

いたすのではございません、勤めの體を嗜す爲暇を見て致して居りますので表裏ではござらん、書を以て名譽を博すとは御支配に似合さる御一言かぞ存ずる、此段平に御断りを申上げます、お上通りへ宜しう是れにて御免を蒙りますと一禮をなして立上がる伊、あゝ失策つた、是は予が悪るかつた、あゝこれく待て登待て登……と仰しやつたが、登はこんく退つて往つて仕舞つた跡に伊豆守が「はい失策つた、これは私の命令けやうが悪るかつた書ぬといつたら容易には書くまい……」といつて京都へ當人が書きませんと云つたら差控へで濟めば好いが切腹でもしなければ成るまい、長門守も切腹しなければ成るまい、こりやあ如何したものであらうと智恵伊豆といはれた位のお方でありませすが、流石に之れには弱つて仕舞まして不圖思ひ付たのは 伊、いつも不中ではあるが彦左衛門の外に是れを説いて描せる者はないと斯う

大久保武藏鑑

思ひましたから、彦左衛門の所へ使者を遣はして迎ひにお遣はし
なさいました、所が彦左衛門此事を聞いて 彦はて、伊豆守が乃公
の所へ迎ひを遣した何んだらう、何か變つたことがあるのだら
う、こりやあ一番するけて置かうと横着至極の彦左衛門、病氣とい
つて其日は断はりました
伊豆守相變らず横着な親父だ、予が迎ひにやつたは何か據所ない
用向といふことを見込んで態と病氣だと虚言を吐いて居るのだ
らう、思ひしい親父とは思召して居るが何うもこれは仕方がない
度々催促をやるの外に道はないと其翌日になると二度も三度も
使者を立てる、相變らず病氣といつて出て来ない、其翌日に至つて
もう大抵好からうといよこ、伊豆守屋敷へ出ますると伊豆守
大いにお悦び遊ばして 伊を、老人、能う見えられて呉れた病氣
といふことじやが如何だな 彦、お言葉を頂戴いたして有難き仕

大久保武藏鑑

合に存じます、折節病氣の爲推參運なり甚だ恐れ入りましたいつ
もながら麗はしき尊顔を拜し恐悦至極に存じます、系、就きまし
ては度々の御使者、何御用にございますか承はりたい、伊、伊豆守
老人に強いて一つの頼みがある、彦、これは、御支配より強て
のお頼みとは恐れ入ります、何んぞございます、伊、外ではないが
是れ、云々の理由だ、彦、へ、系成は、伊、ちと予も言過
ぎたやうにも思ふが、天下に其方の名前を高くすることを申
附けるといつたのが登之助の疝に觸つたかも知れんて、彦、成は
と、伊、栗津の晴嵐を書けといふと彼は目の色を變へて近藤登之
助は旗本である、侍だ何所の先陣を申附けるとか何れの後殿を申
し附けるとかいふことなら悦んでお受けもするが慰みに描く繪
だから一切筆は取れないといつて壺を蹴立て、彼れは戻つて往
つて仕舞つたが、此の儀に就て登之助が栗津の晴嵐を何うしても

認めて呉れんとあれば、伊豆守長門守が京都へ對して申譯がない
兩人ながら切腹でもしなければ成らん命は惜みはせんが、公儀が
旗本へ對して命令が少しも用ひられんやうで、大公儀の御面目に
も係はる一件、彦成程御用へ粟津の晴嵐を認めろ其方の名譽で
あると仰せられた所が拙者は武士だから書は書けない、戰場の魁
又は後殿を申附けるとあれば悦んでお受をするといつて退りま
したか、伊如何にも……彦、むー豪い奴でけすなわ、伊然ふ
向ふへ力量を入れちやあ不可ない、彦、御老中の仰せ、御支配の仰
せだからといつて睡んでこれを書きまするやうでは拙者組の内
から速かに彼を除名いたして仕舞ひます、何うも御老中の勢ひに
驚かず、断つて壘を蹴立つて歸るといふのは感心いたした、夫でな
ければ……伊、夫じやあ不可ないふに、其所だ、何うか一つ扱つ
て貰ひたい、彦、へい畏りましたが別に面倒なことはないじやあ

とさいますせんか京都へ言譯の爲、貴郎が腹を切つて稻葉長門守殿
が腹を切ればそれで……伊、夫なれば其方に頼みはいたさん、成
べく然ふいふことのないやうに無事に書きたいと思ふから心配
をして居るのじや、彦、は、は、御道理でござる、譬ひ京都からの
お頼みにもせよ書一枚の爲に徳川の元老たる伊豆守殿が腹を
召すことは出来ませぬ

第三十五席

彦、左様なれば近藤登之助に御注文通りの書を書せれば好いので
ございませう、伊、勿論のことである、彼れがうんといつて書て呉
れさいすれば仔細はないのだ、四方八方丸く納まるといふもの、吾
々の役目も立つのだ、彦、拙者が然らば書せませう、伊、悉く書し
て呉れるか、彦、必らず書せませぬ、伊、然ふなれば誠に辱けない、過

分に存するが何ういふことにして書して呉れるな 彦「去れば……
……なかく、奴一と筋細じやあ書きませんが、さて世の中に貧程
辛い物はござらん四百四病の其外に辛いのが貧、英雄でも豪傑で
も智者でも賢者でも金子がなければ馬鹿になります、何うしても
金子に傾きます、近藤登之助に對して金子をお遣はし遊ばせ、一
番早うございます 伊「夫れは理由ない、金子で事が済めば何より
易いがうんといつて書かうか 彦「其所に又手段がござる、失禮な
がら貴郎からはただ金子をやるに仰しやつたのでは書きません
所じやあない、却つて腹を立つて何のやうな無禮を申上げるかも
知れませぬ斯ういたしませう、私其金子をお預り申上げて彼の
手許へ夫となく遣はしませう 伊「程、就ちやあ其金子といふの
は何の位 彦「なに聊かて宜しい、ほんの少々ばかり…… 伊「少々
ばかりとは…… 彦「多分のことは要りません、ほんの印しでござ

いますから 伊「本の印しと申しても小判一枚といふ理由にも行
くまい金高を然ういつて呉れ 彦「いゝ、申す程じやあございませ
ん 伊「知らない男だ金高を…… 彦「左様さ先づ二千兩でござら
うかな 伊「ほんの印しでもない、夫りやあ彦左衛門ちと高價のや
うじやあないか 彦「二千兩で高いことではないしやあございませ
んか秀山がうんといつて書きさへすれば、御老中松平伊豆守殿の
お命が助かつて、京都所司代の長門が助かります、万金の黄金白銀
を積んでも貴郎のお命は買ますまい 伊「然う理由から押せば、然
んなものだが…… 然し二千兩ではちと高過ぎる、何うだも少し
負るまいか 彦「賣物買物だから高いと思召しましたらばお止し
遊ばせ…… といふのは愛嬌がないから、じやあござり…… 決着千兩
にいたして置ませう、大變に負けた、惠比壽講の買物をする量見
伊「千兩とは大變に負けた、宜しい、然らば千兩金遣はすが大丈夫

大久保武藏燈

かな書いて呉れやうか 彦はい、此大久保親父が受合ふた以上、も
う間違ひはござらん口巾たいことを申すやうだがもし私しが受
合ふて近藤秀山が書きませんやうなことがあつたら 天正三年以
來の此白髪を御支配に献上いたします 伊「然んな頭を買つて
も仕様がなない 彦、お座敷の中央へ置きますと夜るに成つてびか
く 光り燈火は要りません 伊「よし、夫れ程まで申すなら
伊豆守も誠に安心をして居る千兩の金子は今渡さうが、然し是が
表向に成つて金子が書したといふことが京都へ知れては成らん
から極く、内密に扱つて…… 彦、夫はもう心得て居ります、千
兩の金子は外ながら私しが拜借いたした積りで彼に渡しませう
伊「其所で何日頃出來しやうな 彦、左様で……是はちと即答が出
來ません、日數の所は登之助に對面をいたした上にて確と御返答
をいたしませう 伊「尤も、彦、お屏は…… 伊「是れだ」と差出

大久保武藏燈

だされたお屏、何んといふ名の絹か凡人は見たことのない立派な
物 彦へ、大層立派な物で、然ればお下金を願ます 伊「唯今
申附けるから扣へて居て呉れ」と役人を呼出だして千兩の金子と
並べる、彦左衛門是れを供の者に釣臺で擔がして錦小路の屋敷へ
持運ばせる、伊豆守が千兩の自腹を切るやうな事に成つた
大久保彦左衛門は家へ歸つて參つて 彦「家内や用人の笹尾喜内
が 喜「へい 彦「狗も歩けば棒に當たる、金子を千兩拾つて來たよ
喜「御冗談ばかり、如何に江戸が繁華だと申して千兩の金子が落ち
て居るものじゃあございませぬ 彦「いや、拾つて來たと申し
て往來から人の遣した物を無断に拾つて來れば法に背く、然ふじ
やあない、立派に儲けて來たんだ、那の金子を此方へ運べ 喜「何所
から儲けて入しつたので 嵐「まあ好い、何れ跡で話しをする夫か
らなあの一酒屋、薪屋、醬油屋、八百屋、小間物屋其外出入り町人に太

大久保武藏鑑

分借もあるだらうから残らず通ひをせめさして拂つてやつて呉れ出入りの商人は拂ふべき時に美麗に拂つて置いと跡が利かない、好いか、喜、畏りました、彦、夫れから疊も大分古びて参つたから疊替をて……なに中次は不可ない、疊、備後の上物に限る、瓦屋と屋根屋を寄んで屋根を少し直さして呉れ、喜、畏りました、彦、夫れからの近所の貧乏人に百兩もすいと恵んでやつて呉れろ、乃公が馬で通ると皆んなお辭儀をして居るから……、義をされるのが嬉しいのではないが彦左衛門だなど思ふから、換、するんだ、喜、畏りました、用人も面喰つて仕舞つて、大久保の屋敷は俄かに富貴に成りました、彦左衛門は御扇を懐中にして土手三番町の近藤登之助屋敷へやつて来ると、此方は近藤登之助、怒りに任して伊豆守のお屋敷を飛出だし、己の邸へ立歸つて参つて、伊豆守と長門守に腹を切らせる

大久保武藏鑑

やうなことをして来た、好い氣味だといつてゐる、其頃の旗本であるから毎度述べた通り至つて氣が荒い、今日も家來を相手に頼りに高慢を云ひながら酒を飲んで居る所へ、取、急、申上げます、彦、何んだ、取、大久保彦左衛門様がお出で……、彦、あ、然ふか此方へお通し申上げる……これは、さ、御老人何うか此方へ彦、近藤お前、いことをやつたな、腰に差した扇を出だして煽ぎ立てるから、彦、まあ、御老人、拙者は熱くはござらん、豪いこと、は何んでござるな、彦、何んでござるなどは何事だい、今日私お侍から噂を聞いて来たが、感心をした、那の位の氣概がなければ不可ん彦左衛門忠教が死去いたした後は、旗本が囁や公儀亦大名の爲に押へ付けられるだらうと思つたが、尊公のやうな男が残つて居れば彦左衛門今日死んでも残り惜いことはない、話しの様子に伊豆守と京都の御司代に腹を切らせる程のことをやつた

てゑじやあないか、ゑ、或心々々 登、はい、二三日前に夫をやつて
來ましたが誰か噂さでも…… 登、去ればさ、噂さ所か何所へ往つ
ても其話した近藤といふ男は察いつて 登、は、左様かな、いや
世間てゑ物は何か直きに知る者だ、實は老人、斯ふく、だ、拙者も咽
喉から手の出る程書きたい、唯の品と違つて九條のお家へ納まる
品此上の名譽もないから願つても書きたいが、然し伊豆守のやう
に權柄盡くにははれて見ると心ある武士には書けないじやあな
いか、其所で吾々は旗本だ是を以て家業にはいたさん戦場の先陣
を申附けるとか殿を申附けると仰せあれば悦んでお受に及ぶと
斯ふ遣ち付けたが伊豆守は殊に由ると切腹といふことに成りま
せうと鼻息めかして語る 登、うむ、道理、予も常々伊豆守が旗
本を眼下に見下すので小癩に觸つて成らなかつたが夫を聞いた
んで胸が暗々したよ、あ、一腹が減つた、登、大層旨さうな酒が並ん

で居るじやあないか、何んだ鯛の薄沙其りやあ剛、だ、一杯馳走に
成りませう 登、さあ、召上つて下さい 登、さて近藤、私が
一つ話しがある」と膝を進めました

第三十九席

登、其件が済んだら今度は近藤、私が煽いで貰はなければ成らんこ
とがある 登、へゑ、煽いで貰ひたい事といふのは 登、貴公のは
稻葉長門守と長澤の伊豆に恐れ入らしたんだらう 登、然ふさ
登、此産左衛門のは紀州中納言、藏房殿を恐れ入らして來たんだよ
登、へゑ、夫りやあ面白い全体何うなすつたので 登、夫がさ、八日
ばかり後の話して久し振りで紀州家へ伺ひに出たのだ 登、成程
と、うじ 登、すると紀州の親方が將基を差してお出で遊ばしたか
ら傍で馬鹿な面をして見て居るとな、其方は將基を差すかと斯ふ

大久保武藏鑑

いふんだ、さあ乃公も癪に觸つた、差すかといはれて見ると差すま
いといふ言葉の裏だ、口惜いから知りませんとは云へない、將基は
大名人だと斯ふ云つてやつた 登うむ 彦所が實の所貴公の
る通り將基は空つ下手なんだらう 登貴郎のは飛車が筋替に飛
んで都合が悪いと王様が駒を飛越して逃げるんだ 彦まあさ
つて閑玉ひ大名だ、斯ふいふと夫は幸ひだ、相手を申附ける
といふから委細承知いたした、が只では面白くない、何か賭を懸
たいと斯ふいつた 登老人、大層下賤ばつたことを仰しやつたな
彦いや、夫が手だ、何か私しが勝つたら頂戴を願ひたいと斯ふいふ
とな、如何にも承知したと斯ふいふからまあ兩人りで將基を差し
たと思ひなさい 登成程 彦すると第一番に勝つて仕舞つた
登老人がかな 彦向ふがよ 登は、夫りやあ當然だ、貴郎に負
ける者はありやあし、ない二番目は…… 彦二番目も美事だつた

大久保武藏鑑

な 登美事に勝ちましたか 彦美事に負けた 登やれ、三番
目は 彦三番目も負けた、其負方も實に甚だしい負方でな、大變に
笑はれた 登やれ、彦處で親方のいふには彦左衛門も老老
をした、もう威張つても仕様がな、球戯でも買つて後生を願うが
好いと斯ふいふんだ 登夫じやあ和歌山の親玉を恐れ入らした
んじやあないので貴郎が恐れ入つたんだ 彦いや、此りやあ
口元なのだ、是から恐れ入らした話があるのだが、其所で私が考
ひたな何うかして美事に一番勝つて見たいものだと思つたが中
々勝つことが出来ない、先方が圖抜けて強く此方が圖抜けて弱い
夫れから口惜いから屋敷へ歸つて来て人を遣はして大橋宗敬を
呼んでな、一日二日の内に初段位に成る秘密の手はなかつたか
もしあるなら教へて貰ひたいといふと、何うも近藤何んにでも秘
密といふ者はあるものだ、宗敬が然らば極く秘密の手をお教へ申

さうと斯ふいつてな、其所でいや何うも貴公だから話しをするが
二日三日の内に二段の腕前に相成つたよ。登へえー。彦さあも
う大丈夫だから四日目に親方の所へ罷り出で、過日の敵討をど
いふと、彦左衛門は下手だから不可といつて相手にしない。登こ
りやあ然でございませう。彦夫から私が、いゝ其時は下手でも今
日は名人に成ましたからまあ一番お打ち遊せといつた紀州殿が
的には成んが然は一番……といふので何所までも乃公を馬鹿に
して居る乃公が其所で時に御前、何か賭を願ひたいといふと、あゝ
其の方なら何んでも望め何うせ遣らなくつても済むのだからと
仰つた占めたりと思つて盤に向ひ、此方は二段の腕前だから何ん
の難作もない第一番に物の美事に勝つて仕舞つた二番目とやる
と是れ又前の通り、三番目も物の美事に勝つて何うも夫りやあ紀州の親玉
頭から煙を出して、さあ参れといふから又二番差して五番まで乃

公が連戦連捷よ、二段となるも別段なものだ紀州公が唯乃公の顔
を見て呆氣に取られてお出でなさるから何時まで爲ても同じ事
でございませうから、何うか何か頂戴をしたいと思いますと、あゝ何んか
り共持つて行けといふ、近藤拙者が何んな物を望んだと思ふく
近藤登之助。登、何をお望みなすつた。彦私も類のある者を貰つ
たつて不可ん、何か類のない物を貰つて紀州家を驚かしてやらう
と思つてお座敷を見廻すとあるく。お座敷の正面に五色の葛と
いふのが飾つてあつた、貴様見たことがあるか。登、豫て紀州家
の五色の葛といふ珍物があるとは承つて居るが未だ拜見いたし
たことがござらん。彦、見ないか、それは和蘭陀から將軍家に献上
いたした品で、將軍家から紀州家へ下し置かれた實に夫れは奇代
な品だ、一本の幹にして葉が五色で紅葉のやうな葉もあれば青い
のがある、黒いのがある、白いのがある、紫色の葉がある。登へえー

大久保武藏鏡

見たいものでございませぬ。彦天下無二の珍品夫へ乃公が目
を付けて何うかお床にございます。五色の葛を頂戴をいたしたい
といふと那れは不可ん上様から拜領の品であるから那ればかり
は遣はず理由に不可んに由つて外の者にして呉れるいや外の者
なら要りません、何んでも望みの品をやるも仰せられたではござ
いませんか不可なければ奈是最初に五色の葛だけは不可んとお
断り遊ばしませぬと斯ふいつた。登成はと御道理で……彦
々理屈責めにして床の間にあつた五色の葛を持出すと紀州家が
をいゝ泣出した。登非道いことをなさいましたな。彦泣たつ
て構はない、どうく屋敷へ持つて来て飾つてあるが此の頃に見
せやう、何うだい紀州家が上様から拜領の五色の葛諸侯が皆な見
たがつて態々紀州家へ拜見に来る位いの珍品を催た五番の將基
に勝つて分捕つて来るといふのは凄いだらう、紀州家に恐られ入

大久保武藏鏡

らしたといふは則ち此の事だ。貴様は伊豆守に恐れ入らせる、乃
公は紀州家に恐れ入らした一割の話して面白じやあないか
登は、あ然ふでござるか、夫りやわ結構な品が御手に這入りまし
たお屋敷にございますか。彦屋敷にあるよ。登拜見したいもの
でけすなあ。彦然ふく貴公は至つてあゝいふ者が好きだつた
な。登益裁が大好きで。彦じやあ獻じやう。登名……全たく
下さるか。彦彦左衛門僞りはいはん、あゝいふ物は嫌ひだ、意地な
ればこそ貰つても来たが無暗に水をやつて枯して仕舞つても不
可ん、植木屋に預けるのも心でない誰にか遣らうと思つて居た所
だ尊公に遣はさうだが爰が相談だ、紀州家で惜んで居た品を所
なく近藤登之助にやつて仕舞つたとあつては誠に相濟まん。登
御道理で。彦斯ふしやう取替つ子をしやう。登取替ると仰しや
るが五世の葛に替へるやうな品がござらんか。「いや、あるく立

派にある。登はてな。彦、紀州公の鼻を折つた篇を尊公に獻づる。代りに伊豆守の鼻を折つた粟津の晴嵐を拙者に書いて呉れ。登、夫は易いことだ、手を持つてすることだから、評ハきい、書位いで宜しければ早速。彦、早速といつて粗末な物を書いて呉れた所で、宜い事だが心を籠めて書いて何時出来やう。登、左様、十日位は念を入れたら掛りませうかな。彦、然ふか、じやあ右の書が出来上つたら私の所へ届けて下さい、其の時に右の品と引替へやうから。登、悉細、承知いたしました、然し何へ書きましたもので。彦、いや、唯の品では面白くない、拙者が戴いた帛があるから此帛へ何うか書いて貰ひたい。登、こりやあ結構なお帛、書が落ちますよ。彦、然んなことがあるものか、假令落ちても秀山といふ落款さへ打つておれば結構だ、じやあ何分頼む出来上つたら屋敷へ届けてお呉れよ」と彼の九條殿の帛を預けて彦左衛門は立歸りましたが、近藤登之助

秀山、購はれるとは、露だに知らず五色の篇といふ天下の珍品を貰ひたい一心で、精神を凝らして、始めましたから十二日目に最も美事なる粟津の晴嵐の書が出来しました、用人内田求女が是を彦左衛門の屋敷に持参に及ぶ、彦左衛門が五色の篇の偽物を拵へるといふ滑稽談

第四十席

十二日目に彦左衛門もう帛を持つて来さうなものだと思つて居る所へ、喜、申上げます。彦、何んじや。喜、近藤様からお使者でございまして、内田求女殿が御約束の品出来いたしましたに依つて持参いたしましたといふことでございませう。彦、あゝ、出来たか、是へ通せと相待つて居る所へ求女罷り出で、求、御老体御機嫌好く大慶至極に存じます、主人申付けには豫て御依頼の粟津の晴嵐出来仕り

大久保武藏鑑

ました、何うか御一覽を願ひたい、就ましては願つてある品を藏
て參れといふことでございまして 彦、あゝ左様か、粟津の晴嵐が
出来上つたから五色の馬を買つて來いと 求、左様でございます
彦、よし、届けやうと思つて居た所だ、これ書を拜見をしやう
求、御覽下さいと夫へ差出したる品、彦左衛門披いて見ると書きも
書いたり登之助、粟津の景色を本當に見るやうな心持ち 彦、近藤
登之助といふ人物は豪いなわ槍を取つて戰場に進む時は三面六
臂の鬼神の如く、退いて筆を取れば優にやさしき此畫の妙、恐れ入
つた……喜内何うだ大した畫じやあないか 喜、御意にございま
する 彦、此來だな歸つて左様申して呉れ能く出來た、彦左衛門悅
んだと申して呉れ、もう是で好いから歸れ 求、あゝ五色の馬と申
しまする物を頂戴をいたして來いといふことで 彦、夫は私がい
づれ兩三日の内に…… 求、ではございませうが引替にいたすお

大久保武藏鑑

約束でございますから 彦、何うも堅過ぎて困る、引替へといふ約
束であるから今日は是非引替へて行くと申すのか 求、左様で何う
も差置て參る理由には成兼ねます 彦、然ふか道理だ、夫なら今渡
してやるから少々待つて居れ 求、長りました
彦、左衛門此方へ來て 彦、中々事情の使者だ喜内又一つ用が殖へ
た 彦、何んでございます全体其御用といふのは 彦、勘ふ、い
ふ理由でな、過日千兩の金子を持つて來たらう 喜、へえ 彦、那の
千兩の金子は近藤にやるのだが面だから乃公が使つちまつた
んだ 喜、非道いことをかさいます、面倒だからといふて人の金子
を…… 彦、もう那りやあしまい、その金子は 喜、七十兩ばかり殘
つて居ります 彦、やれ、其所で其金子の代りに五色の馬とい
ふ物をやる約束をして來たのだ 喜、五色の馬と申しますと 彦、
汝等の知る所でない、將軍家から紀州家が拜領なすつた天下一品

……私も二三度拜見したことがあるが、一本の幹にして五色の葉
でいや何うも實に珍物だ、夫をやる約束をして来た。喜、何所か
らお貰ひなすつて。彦、家にあれば心配はないのだが貰つて来て
あるからお前にやらうと虚言を吐いて来たのだ、何か五色の蔦ら
しい物をやつて呉れ。喜、然んな物はございませぬ。彦、やらなけ
れば帛を置いて行くまいし、今日にも伊豆守が此帛を落手せにやあ
腹を切らねば成らん、あゝ困つたことが出来た庭へしろりと眼
を注げると、何かあつたと見へて。彦、喜内や。喜、へえ。彦、垣根の
此方にある蔦のやうな葉は何んだ。喜、シイラゲでございます
彦、那れ。丁度好い、枝振りの面白さうなのを持つて来て呉れ……
うむ、程、此葉の尖のある所は全るで蔦だ。喜、蔦とは違ひます
彦、貴様は種を知つて居る、シイラゲだと思つて見るからシイラゲ
に見へる蔦だと思つて見る。喜、蔦とは思へません、矢つ張りシイ

ラゲで。彦、是で好い、其所に鉢があるだらう餘り新らしいのは不
可ん、跡で大根を一本持つて来い。喜、何んになさるので。彦、何ん
にしても好い、乃公に任して置けと彦左衛門大根を取寄せて植木
鉢の丈だけだけにすばりと切つて、夫を鉢の中に入れ、シイラゲの枝
を大根にぶつりと差し込み。彦、銀砂があつたな。喜、へえござい
ます。彦、持つて来い、銀砂で大根を隠し。彦、そら。喜、来た、其所
で葉を五色に彩色をせにやああらんが、ゴフンと墨と紅、売を持つ
て来て呉れ。
天下無二の珍品、五色の蔦に窮して彦左衛門はシイラゲを植木鉢
に立て、葉に紅、売、ゴフン、墨を以て彩色をいたしたによつて成程
五色の蔦が出来た。彦、何うだい喜内、名作だらう。喜、恐れながら
御前にも似合しからん、全で子供の嬉戯に等しきなされ方でござ
いますな。彦、然ふでない、併し物は其物、自分よりは外形の裝飾が

大久保武藏鑑

好くあければ立派に見へんものだ、箱へ納めてやらうだが別に桐の箱もなし、いや本箱を持つて来い、悪いので好いよ、あゝ是が丁度好い、是れの中へ入れて蓋を斯ふして、其所でこゝん所が喜内六ヶし、ひ何れ使者が中を改めるだらう、傍で蓋を明けて見られちや、あ叶はんから求女を呼んで遠くで本箱の蓋を乃公がこゝ明ける、求女が顔を上げて見るに相違ない、すると後に其方が控へて居て能く改められると不都合だからしつゝと警蹕の聲を掛ければ尊ひ品だと思つて頭を下げる、其内に乃公が蓋をして此通りである、と申聞ける、喜、何うも御前のなさる事は私しの腑には落ちません、彦、なに構ふものか、其所のおさなりさへ好けりや、あ好いんだから、喜、然し左様な偽物を知らずして持つて歸つたら使者の落度、に成つて切腹でも申附けられるやうな事に成りはいたしませんか、彦、左様も不東な事をさせる私じやあない、大丈夫だから求

大久保武藏鑑

女を是へ呼べ、喜はつ……さ内田殿大きに御待遠でございまして、御約束の品お渡し申し上げますから是れへ、求、左様でござるか、と夫へ進んで参つた、彦、左衛門上座に本箱を扣へて、彦、大きに待遠であつたの、斯ういふ品であるから能く改めて持歸れ、其方は果報者だ、今日使者に参つたればこゝろ斯様な物が拜見が出来ると、嘸悦ぶだらう、さゝ改めて行きなさい、此通りを……「といふと本箱の蓋を取つた疊、四五疊の下、手に求女が両手を突いて首を上げて見ると、箱の中にあるのは何様、黒い所もあれば白い所赤い所があるから五色の薦に違ひないと、尙膝を進めんとした時、後でしつ……と警蹕の聲を掛けられるから、求、はゝあゝと平伏をする途端にびたりと蓋をして、彦、何うだ、美事なものだらう、彦、左衛門のする事であるから大丈夫であらうと存じて、求、仰せ

の如く最も美事なるお品にございます。喜内は後で噴飯したいが
じつと我慢をして居る。彦改めたらさう早く歸つて主人を悦ば
してやんなさい、鳥は確かに預かつたぞ申して呉れよ。憐れなる哉
内田求女、何んにも知らず御禮を述べて屋敷へ立歸る。
此方は近藤登之助。今日は五色の葛を返られる誠は何うも悦ばし
いと用意をいたして親類一同に觸を廻し、酒宴を開いて居る所へ
求女が只今立歸りましてございます。登を、歸つたか如何い
ました。求、五色の葛頂戴いたして参りました。登、夫りやあ芽出
度い。と本箱を正面床の間へ据へる。親類の方々も、大久保彦左衛門
といふ人は豪い人だ。和蘭陀から献上、上様から紀州家へ下された
天下一品の五色の葛を雜作もなく當家へ下さるとは……と威服
をして居る。登之助は手洗ひ口注ぎ恭々しく其所へ参つて箱を暫
く見て居たが、登、求女、是は本箱らしいか。求、らしい所ではござ

いません、全くの本箱で蓋に雜書と書てございます。登、は、蓋
左衛門といふ男も妙な男だ、先に箱なして頂戴して来たんだな、俄
かに箱を差せるなんて是のは面倒臭いといふので有合した本箱へ
入れて遣したに相違ない。と蓋を拂つて黒檀の臺の上に乘せ、登之
助じつと葛を凝視して居た。御親類の方々も、甲、成程と黒い所があ
つたり白い所があるから五色の葛には相違ないが、一寸ソイラケ
に葉が似て居やうではござらんか。乙、左様さ、和蘭陀の葛は葉が
幾分か日本の葛とは違ひます。

第四十一席

近藤登之助暫くの間葛の様子を見て居たが指を付けて白い所を
擦ると忽ち白い色が指の先さへ付く。登、はて心得ずと赤いの
を擦ると是れも付く。登、こりやあ彌々妙だ。と指の先さで銀砂を

除けて見ると大根にシイラケが差してある、登之助は面色朱の如く
く植木鉢を庭前に投出だして 登、求女、其方斯様な物を改めんで
受取つて参るといふ法やある、不行届き者めが……」とはつたと白
眼みました、求女は恐れ入つて下を差俯向き、道理こそ彦左衛門の
見せやうが可笑いと思つた」と考へて居る 登、彼を談してから其
方に申付くべき次第あれば誰んで罷りあれよ、これ誰かある馬引
つ、標を掛け鉢巻をいたし二間柄黒千段巻大身の槍を携へて玄關
より馬にひらりと打跨がり 登、はよ……」とうくく……と鉢
小路の彦左衛門の屋敷を差して行く
彦、喜内 喜へえ 彦、もう彼是れ登之助が怒つて来るぞ 喜、御前
何うなさいます 彦、は、は、大きな聲を出しても心配をするな
乃公に斗う旨があるといつて居る所へ玄關で 登、頼むく」と大
きき聲 取、はい」といつて取次の者が出て見ると、驚いたのは槍を

携へて鉢巻をして居る、喜内に斯くといふと 喜、そーらころ始ま
つた、御前大變で、近藤様が槍を携へ鉢巻をしてお出でに成りまし
た 彦、奇に槍を持つて鉢巻をして来た途中で那の男悠氣な男だ
から仕度をして来たものに見へる、私は寝るよ床を敷け 喜、御殿
なつて、仕舞なすつちやあ不可ません 彦、いや、私が寝たらば是へ
引張つて来い好いともく驚くことはいない、俄かに其所へ床を爲
かして着たなりで潜り込んで仕舞つて頭を出して居る 登、やい
く起きろ狸親父 彦、あ、一苦しいく 大病で死にさうだ 登、
顔巻けるぞ 彦、何んだ、何うしたんだ 登、何んでも好いから庭前
に於て勝負をいたせ、平生其方は貞宗の切味を見せたいく、と申
して居つたから今日は其味ひを見に参つた、拙者の持参いたした
る槍の味が好いか、汝の貞宗の味が好いか、今日は比較べやうと思
つて参つたのだ彦、比較するなら比較ても好いが、まあ少し待つて呉

れ彦今起さるよ乃公も天下の旗本だ大病だからといふて勝負待
つて呉れる杯といふ卑怯なことは申さないで勝負をしやうだが
……まあ全体何んだつて然ふ腹を立つて来たのだ登知れたこと
だ乃公に粟津の晴嵐を書して置きながら夫と交換すべき五色の
馬子供欺しと申さんか人を馬鹿にしたといはんか侍たるべき者
が偽はつて好いか此理親父奴彦は、あ禿げたか彦登禿げた
かもねえもんだ彦いや夫やあ彦うも彦ぐすぐいふな出る
出る早く彦じやあ此彦を衛門と果し合ひをしやうといふので
出て来たのだな彦左様もう此場にて勤辨して呉れると申し
たつて不可ん彦いや許したいと申しても此方で許すことは出
来ない如何にも望みの如く勝負はいたすが其前に一言聞いて置
きたいことがある彦何を聞きたいか別に聞く必要もあるまい紀
州家に於て頂戴した五色の馬をお前にやるといつた其が偽物で

あつて見れば一言もいふ所はあるまい彦だが能く考へて見る紀
州家は將基の強いことは天下の評判だ夫れに何んぞや一日や二
日稽古をした所が空つ下手の某が勝てる道理はあやしやあま
か彦大橋宗敬に教へて貰つて二段の腕前に……彦夫からし
て虚言だ彦あ、虚言だ彦立派な虚だ然んかことは何うでも
好いとして登之助お前は全体誰の家来だい彦詰らぬことを聞
く彦將軍家の家来だ彦うむ乃公も將軍家の家来だが老中伊豆
守所司代長門守は那りやあ誰の家来だ彦彦矢張將軍家の家来
よ彦然ふだらう其所で老中といふ役所司代といふ役は誰が許
してさして置くんだい、名、近衛……
彦老中も所司代も皆將軍家のお目鏡に由つて御申附けなすつた
のだ彦うむ然らば將軍家の御眼代御名代として居るのが伊豆
守だらう伊豆守の命を貴公が背かば取も直さず將軍家の命を背

いたのではあるまいか、其伊豆守に切腹をさしたら何うする稻葉長門守が腹を切つたら何うする登、うー成程……彦成程じやあ
ない犬も朋輩も朋輩も朋輩輩たるべき者は助け合ふのが是れ道だ
現んや將軍家の御名代に腹を切らしたなら大變だ、然んな愚かな
近藤ではあるまいと思つた尋常では書くまいと思つたから偽り
を述べて粟津の景を書いたのだ公の愚を補ひ伊豆守長門守の
役目が立派に立つて公儀が支配トへ對するの威令嚴肅さる所を
京都へお目に掛け九條殿の御望みも叶ふといふ四方八方宜しけ
ればこそ取計らつたる一條だ貴様は伊豆守と長門守に自滅さし
て自慢にするかは知らざれども味方打をなすは戰場に於ても禁
してある早くいへば味方打ちをするも同様であるぞ登、うひー
彦、夫ども彦左衛門のいふ事が違つて居るか能く沈着て物を考ひ
て見なさい道理至極の言葉に流石の登之助最初の勢ひ同所へや

ら氣の抜けた辛子見たいになつて仕舞つて登、うひー……と迂
鳴つて居る彦、只強いはかりでは不可ない暴虎馮河の勇は武士
たるべきもの、謹む所だ貴様が癪に觸つたといふのは私事だ
分つたかい登、相分つた彦、分つて見れば彦左衛門と果し合を
するか登、成程犬も鷹も朋輩夫に腹を切らせやうとしたのは拙
者が悪るかつた彦、然うだらう近藤の家が危いから私が助けて
やつたのだ登、御深切の段辱けあい彦、勝負をするか登、何う
いたして彦、禰鉢巻で人の家へ來るとは無禮な男だ脱んなさい
登、はい、すると彦左衛門俄に腹巻を付て小手脛當を付る登、貴公
何をするんだい彦、何をするんだい乃公も武士だ果合をす
ると言て來のだから一、始め様登、分つたよ貴公、何も風が悪る
い、人の勇氣の脱けた時分に彦、勇氣が脱けたといへば夫まで、何
も好んで味方打をするには及ばない、分つたかい登、分つたよ

彦「じゃあまあ一盞献上しやう、喜内床を上げちまへ。登「假病かい
彦「勿論よこれ酒の支度をしろ、夫から言後れたが伊豆守に逢つた
らちよいと禮を云つて貰ひたい。登「拙者は別段伊豆守に禮をい
ふ次第がない。彦「夫があるんだ、近藤大負けに負けて呉れ、實は乃
公が伊豆守屋敷へ呼ばれて聞いて見ると、これくだといふ、じや
あ私が金子をやつて書せませうといつて先方から金子を三取つ
た、然し其金子を貴様にやつたら無禮だとか何んとかいつて怒る
だらうと存じてな、兎も角も乃公が預かつた。登「夫りやあ有難い
實は老人勝手不如意で此頃は弱つて仕舞つたのだから頂戴をし
やう。彦「所が預つて居る内に乃公が使つて仕舞つたのだ。登「悉
く彦「乃公が使つてしまつたのだよ、然んな苦い顔をしなさんな
然し乃公ばかりで使つたのじやあ、近所の貧乏人にも大分施
してやつたお蔭様で漸う屋根が出来た、明日疊替をしやうと思つ

て。登「何の位来たんだい。彦「なに聊かだ。登「何うせ粟津の時嵐
一枚書くんだから多分のことはいたすまい、二千疋も遣したか
彦「いや、其半分。登「千疋か。彦「千兩だ。登「千兩。彦「うむお前の方
へやらうと思つて居る内に終金子は重寶な物だから使つて仕舞
つたが何れ儲け仕事があつたら其時は返すよ、何うか殿中で面會
したら外ながら先日是有難つたといつて呉れ。登「斯んな聲は
ない」と呆れて居りましたが、成程彦左衛門のいふ如く一時の怒り
に任して伊豆守と長門守に腹でも切らせれば己の家は立ない、し
て見れば千兩では易いものだ、彦左衛門への禮だといつて昔しの
武士は洒落したもの、何んにもいはすに立歸りましたが是が有名
の彦左衛門逸話の一つであります借て永らく講じ續きの武蔵銀
餘り長いのも如何だから一度是にて區切つて亦改めてやつたら

大久保武藏鏡

何うだものこと故に爰にて一度結局といたします

百七十二

大久保武藏鏡

後編終

明治三十三年十二月十日印刷
明治三十三年十二月十五日發行

講演者

松林伯圓

發行者

田平義三郎

印刷者

竹川吉太郎

印刷所

上田屋印刷所

發行所

上田屋書店



東京市日本橋區本石町二丁目十六番地
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

終

